

一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書XXXII

鳥取県鳥取市鹿野町

OTSU GA SE OH SUMI

# 乙亥正大角遺跡

2016

鳥取県埋蔵文化財センター







一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書XXXII

鳥取県鳥取市鹿野町

OTSU GA SE OH SUMI  
**乙亥正大角遺跡**

2016

鳥取県埋蔵文化財センター



## 序

山陰自動車道は、一般国道9号の交通渋滞の緩和、災害時や緊急時における緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている自動車専用道路です。この道路は山陰地方を東西に結ぶ大動脈として、地方都市間の連携を強化し、環日本海交流の一翼を担うことも期待されています。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、鳥取市本高から同市青谷町を結ぶ事業区間である「鳥取西道路」の改築に伴う発掘調査を、平成20年度から実施しています。平成27年度末時点での調査した遺跡は7遺跡、調査面積は延べ7万平方メートル以上に及んでいます。

本書に掲載した、鳥取市鹿野町に位置する乙亥正大角遺跡は、平成26年度に発掘調査を行い、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物を確認するに至りました。特に、古墳時代前期の集落跡や中世の掘立柱建物跡などを確認したことは、この地域の歴史を解明するうえで欠くことのできない調査成果といえます。

さらに、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも当センターの重要な業務であり、こうした調査成果が郷土の歴史を解き明かしていく一助となることを期待しています。

本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものです。本書をまとめるにあたり、国土交通省中国整備局鳥取河川国道事務所並びに、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成28年10月

鳥取県埋蔵文化財センター

所長中原齊

## 例　言

1. 本報告書は、国土交通省鳥取河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成26年度に行った乙亥正大角遺跡の発掘調査報告書である。

2. 一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、鳥取県が受託したものは、県埋蔵文化財センターと県教育委員会(公益財團法人鳥取県教育文化財団へ再委託)が分担して実施した。

このため、両者が刊行する発掘調査報告書を一連のものとするため、巻次を下記のとおり振り分けている。

巻次Ⅰ、Ⅱ、XXXⅠ～：発行者　鳥取県埋蔵文化財センター

巻次Ⅲ～XXXI　　：発行者　鳥取県教育委員会

なお、このほかに一部の発掘調査については公益財團法人鳥取市文化財団が受託し実施したものがある。

3. 本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。

鳥取市鹿野町乙亥正128外　　調査面積：3,800m<sup>2</sup>

4. 本報告書の執筆は原田雅弘、坂本嘉和(以下、「調査担当職員」)が分担してを行い、編集は坂本が行った。執筆者名は、目次に記した。

5. 発掘調査は、鳥田組・アイコンヤマト共同企業体の支援を受け実施した。掘削作業や記録作業、測量作業は埋蔵文化財センターの指示のもと、同企業体が行った。

6. 本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センターが行った。

7. 本報告書で使用した遺物写真は調査担当職員が撮影した。

8. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。

9. 本報告書で示す標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準としている。本文中ではT.P.は省略している。方位は公共座標北を示し、磁北は、座標北に対し、7°30' 西偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。

10. 本報告書に掲載した地形図には、下記の地図を使用した。

「鳥取市都市計画図」鳥取市作成、「1/25,000地形図『鹿野』『浜村』国土地理院発行

11. 本報告にあたり、自然科学分析(放射性炭素年代測定、樹種同定)を株式会社パレオ・ラボに委託した。

12. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に御助言や御支援、御協力をいただいた。記して深謝いたします(五十音順)。

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取県土整備局鳥取県土整備事務所、鳥取市教育委員会

## 凡 例

- 遺物の注記における遺跡名は「乙オオスミ」の略語を用い、併せて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
- 乙亥正大角遺跡では本調査における遺構番号(新)は発掘調査時のもの(旧)と変更している。新旧の遺構名・番号の対応は下記の遺構名新旧対照表(表1)で示すとおりである。
- 本書における実測図の縮尺については、特殊なものを除き基本的に以下の縮尺としている。  
遺構図 テラス・掘立柱建物跡: 1/60、1/80、集石土坑・土坑: 1/40  
遺物実測図 土器: 1/4、石器・石製品: 3/4・1/2・1/3、木製品: 1/8
- 本書における土層名称は、基本的には『新版 標準土色帖』による。
- 本書における遺物番号は算用数字を種別毎に付している。ただし、土器以外の遺物には数字の先頭に以下のアルファベットを付している。  
石器: S、木製品: W、銅製品: B、古錢: C

- 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺構図や遺物実測図におけるトーン及び記号は、基本的に各図に凡例を示す。ただし、説明がない場合は以下のとおりである。

遺構図

■: 地山

遺物実測図

■: 赤色顔料付着範囲

→: ケズリの方向(砂粒の動き)

- 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

- 本報告書における遺構・遺物の時期決定については下記の文献を参照した。

弥生土器: 清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年-山陽・山陰編-』木耳社

土 師 器: 牧本哲雄 1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅶ・圓第6遺跡』財團法人鳥取県教育文化財団

須 惠 器: 岡田裕之・土器検討グループ 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

陶 磁 器: 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会

上田秀夫 1989 「14から16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会

森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会

横田健次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』

表1 遺構名新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧
集石土坑1	S2	溝1	S122	ピット10	ピット群3
集石土坑2	S1	溝2	S125	ピット11	ピット群3
集石土坑3	S3	テラス1	S124	ピット12	ピット群3
土坑1	S116	テラス2	S123	ピット13	ピット群3
土坑2	S141	テラス3	S25	ピット14	ピット群3
土坑3	S423	テラス4	S132	ピット15	ピット群3
土坑4	S374	埋没谷5	S4	ピット16	ピット群3
土坑5	S360	ピット1	ピット群1	S337	ピット17
土坑6	S191	ピット2	ピット群1	S338	ピット18
道1	S40	ピット3	ピット群1	S339	ピット19
道2	S40	ピット4	ピット群2	S107	ピット20
道3	S126	ピット5	ピット群2	S31	ピット21
道4	S127	ピット6	ピット群2	S72	ピット22
掘立柱建物1	S41~S46	ピット7	ピット群2	S36	ピット23
掘立柱建物2	S223, S225, S227, S229	ピット8	ピット群2	S69	ピット24
	S298, S304, S305, S308	ピット9	ピット群3	S416	ピット群2

# 目 次

## 目次

巻頭図版

序

序文

例言

凡例

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	(原田) 1
第2節 発掘調査の方法と経過	(原田) 2
第3節 調査体制	3

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	(坂本) 5
第2節 歴史的環境	(坂本) 5

## 第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡の概要	(坂本) 9
1 遺跡の立地と基本層序	9
2 調査成果の概要	14
第2節 第1遺構面	(坂本) 17
1 概要	17
2 集石土坑	17
3 道路遺構	18
第3節 第2遺構面	(原田・坂本) 20
1 概要	20
2 段状遺構	20
3 掘立柱建物跡	22
4 土坑	25
5 溝状遺構	28
6 ピット群	29
7 埋没地形と包含層出土遺物	32
8 その他の出土遺物	45
遺物観察表	46

## 第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定	(株式会社パレオ・ラボ) 51
第2節 樹種同定	(株式会社パレオ・ラボ) 57
第5章 調査のまとめ	(坂本) 63

写真図版

報告書抄

## 挿図目次

第1図	鳥取西道路関係遺跡位置図	1	第29図	土坑6	27
第2図	調査位置図	2	第30図	土坑6出土遺物	28
第3図	遺跡位置図	5	第31図	溝1	28
第4図	周辺遺跡分布図	6	第32図	溝2	28
第5図	勝見15号墳縄塚外容器	8	第33図	ピット群1分布図	29
第6図	調査前地形測量図	9	第34図	ピット群1・2	30
第7図	調査区中央土層断面図(1)	10	第35図	ピット群1・3出土遺物	30
第8図	調査区中央土層断面図(2)	11	第36図	ピット群2分布図	31
第9図	斜面部土層断面図	12	第37図	ピット群3分布図	32
第10図	調査区南壁土層断面図	13	第38図	ピット群3	33
第11図	第1遺構面遺構配置図	14	第39図	ピット群出土柱・杭材	34
第12図	第2遺構面遺構配置図	15・16	第40図	埋没谷1	35
第13図	集石土坑1	17	第41図	埋没谷1 II層出土遺物	35
第14図	集石土坑2	17	第42図	埋没谷1 III層出土遺物(1)	36
第15図	集石土坑3	18	第43図	埋没谷1 III層出土遺物(2)	37
第16図	集石土坑1・道1出土遺物	18	第44図	埋没谷1 IV層出土遺物(1)	38
第17図	道1・2	19	第45図	埋没谷1 IV層出土遺物(2)	39
第18図	道3・4	20	第46図	埋没谷1 II～IV層出土遺物	39
第19図	テラス1・2	21	第47図	埋没谷2～4	40
第20図	テラス3	22	第48図	埋没谷5	41
第21図	テラス4	23	第49図	埋没谷5 遺物出土状況図	42
第22図	掘立柱建物1	24	第50図	埋没谷5出土遺物(1)	43
第23図	掘立柱建物2	25	第51図	埋没谷5出土遺物(2)	44
第24図	土坑1	26	第52図	表土・搅乱土等出土遺物	45
第25図	土坑2	26	第53図	暦年較正結果	54
第26図	土坑3	27	第54図	遺跡周辺の地形と地質	62
第27図	土坑4	27	第55図	乙亥正大角遺跡試掘トレンチと出土五輪塔	64
第28図	土坑5	27			

## 挿表目次

表1	遺構名新旧対照表		表7	木製品観察表	50
表2	土器・土製品観察表(1)	46	表8	金属器観察表	50
表3	土器・土製品観察表(2)	47	表9	測定試料及び処理	53
表4	土器・土製品観察表(3)	48	表10	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	53
表5	土器・土製品観察表(4)	49	表11	樹種別同定結果	58
表6	石器・石製品観察表	50	表12	樹種同定結果一覧	58

## 文中写真目次

写真1	調査前の地形(南西から)	4	写真4	斜面部調査風景	45
写真2	表土剥ぎ後の状況(南西から)	4	写真5	遺跡内に集積された五輪塔	63
写真3	ピット群3ピット13検出状況(西から)	33			

## 図版目次

PL. 1	1 調査後航空写真(北から)	5 ピット群2 ピット8 土層断面(西から)
	2 調査後航空写真(西から)	6 ピット群2 ピット6 土層断面(西から)
PL. 2	1 調査後航空写真(上が東)	7 ピット群3 ピット12 土層断面(南から)
	2 斜面部第1 遺構面完掘状況(東から)	8 ピット群3 ピット13 土層断面(南から)
PL. 3	1 集石土坑1 檢出状況(東から)	PL. 11 1 ピット群3 ピット19 土層断面(南から)
	2 集石土坑1 半裁状況(東から)	2 ピット群3 ピット21 土層断面
	3 集石土坑2 檢出状況(北から)	(南西から)
PL. 4	1 集石土坑3 檢出状況(南から)	3 埋没谷5 遺物出土状況(1)(北から)
	2 道1 完掘状況(北から)	4 埋没谷5 遺物出土状況(2)(南東から)
	3 道2 完掘状況(北から)	5 埋没谷5 遺物出土状況(3)(北西から)
PL. 5	1 道3・4 完掘状況(北から)	6 埋没谷1 遺物出土状況(1)(南から)
	2 斜面部第2 遺構面完掘状況(東から)	7 埋没谷1 遺物出土状況(2)(南西から)
	3 斜面部第2 遺構面完掘状況(西から)	
PL. 6	1 埋没谷1 土層堆積状況(北西から)	PL. 12 1 道1 出土磁器
	2 平坦部埋没谷5 完掘状況(北西から)	2 道1・ピット群・埋没谷1 出土土器
PL. 7	1 テラス1・2 完掘状況(北西から)	3 埋没谷1 出土土器(1)
	2 テラス3 完掘状況(北西から)	PL. 13 1 埋没谷1 出土土器(2)
PL. 8	1 テラス4 完掘状況(南から)	PL. 14 1 埋没谷1 出土土器(3)
	2 掘立柱建物1 完掘状況(西から)	PL. 15 1 埋没谷1 出土土器(4)
	3 掘立柱建物1 柱穴5 土層断面(西から)	PL. 16 1 埋没谷1 出土土器(5)
	4 掘立柱建物1 柱穴6 土層断面(南西から)	PL. 17 1 埋没谷1 出土土製支脚
PL. 9	1 掘立柱建物1 完掘状況(東から)	2 埋没谷5・表土出土土器
	2 土坑2 完掘状況(西から)	PL. 18 1 集石土坑1・埋没谷5 出土遺物
	3 土坑3 完掘状況(南東から)	PL. 19 1 表土等出土土器
PL. 10	1 土坑6 完掘状況(南から)	2 鉄製品・銅製品・古銭
	2 ピット群1 ピット2・3 土層断面	3 刺片石器・玉作関連遺物
	(南から)	4 石器
	3 ピット群2 ピット4 土層断面	PL. 20 1 掘立柱建物1・ピット群出土柱・杭材
	(南西から)	2 ピット群出土柱・杭材
	4 ピット群2 ピット7 檢出状況(南から)	

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

山陰自動車道は、鳥取県鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長約380キロメートルの自動車専用道路である。この道路は、鳥取・島根・山口3県の主要都市を東西に結び、山陰地方の産業経済の発展や観光振興、交通渋滞の解消と緩和、災害時の緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている。鳥取西道路は、山陰自動車道のうち鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの区間で、鳥取インターチェンジで鳥取自動車道(中国横断自動車道姫路鳥取線)に、青谷インターチェンジで国道9号「青谷・羽合道路」に接続し、高速道路ネットワークの一翼を担う。

鳥取西道路の計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く認められていたため、道路建設工事に先立って国土交通省、鳥取県、鳥取市で協議し、計画地内に存在する埋蔵文化財の状況を把握する必要性が確認された。そこで、平成17年度からは計画地内の踏査(分布調査)や鳥取市教育委員会による試掘調査及び確認調査が進められ、調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。

乙亥正大角遺跡は、浜村川中流域東岸の沖積平野に面した丘陵斜面裾部に位置する(第1・2図)。平成25年度に鳥取市教育委員会が文化庁の国庫補助と県費補助を受けて試掘調査及び確認調査を行った。その結果、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されたため、道路盛土部分及びトンネル坑口部分となる計3,800m<sup>2</sup>を対象として記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第94条による手続きを経た後、平成26年度に鳥取県埋蔵文化財センターが国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて発掘調査を実施した。



第1図 鳥取西道路関係遺跡位置図

発掘調査に当たり発掘作業や調査記録作業等について、島田組・アイコンヤマト共同企業体の支援を受けた。

## 第2節 発掘調査の方法と経過

### 1 調査区の名称と調査方法(第2図)

乙亥正大角遺跡の調査前の状況は水田・畑地・山林である。丘陵斜面の谷部と、そこから広がる平坦部を段状に開墾しており、丘陵斜面部と平坦部の境には3m程度の比高差が生じていたことから、調査区を便宜的に斜面部と平坦部に区分けした。

調査対象範囲を含む範囲の調査前地形測量を、平成25年度末に業者委託により実施した。表土剥ぎ終了後、世界測地系国土座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定しグリッドを設けている。グリッド名は、X = -55510m・Y = -25020mの交点を基点とし、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を用い、各交点の北東杭名を探った。座標は、斜面部ほぼ中央D 4 杭X = -55540m・Y = -25050m、平坦部ほぼ中央E 8 杭X = -55550m・Y = -25090mなどである。

検出した遺構や遺物の記録は、トータルステーションによる電子測量を現地で行い、CADを使用し図面作成を行った。必要に応じて写真測量も併用した。現地での写真撮影は35mm判、プローニー(6×7)判カメラ、4×5判カメラを用い、地上または写真用足場上から行った。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーネガフィルムを使用し、デジタル一眼レフカメラも併用した。調査後の航空写真撮影はプローニー(6×6)判カメラを用い、併せてデジタル一眼レフカメラも使用した。遺物写真撮影についてはプローニー(6×7)判カメラ、4×5判カメラを用いた。

### 2 発掘調査の経過

平成26年6月5日に調査前地形測量を行い、6月16日には重機による表土掘削を開始した。6月17日には表土掘削と並行する形で発掘作業員による人力掘削に着手し、まず、基本層序を把握するために調査区壁面及び調査区中央付近にトレチを設定し、掘削した。斜面部の調査は7月18日に第1遺構面の調査を終え、10月17日には第2遺構面の調査を終えた。平坦部の調査は、着手後に調査区西側



第2図 調査位置図

の市道岡井梶掛線ボックスカルバート工事に伴う地盤改良工が10月に着工される工程が示されたことから、工事の影響が及ぶ概ね9ライン以西の調査を先行することとした。9月22日には地盤改良工影響範囲の調査を終え、11月21日に現地での調査を全て終了した。

調査の結果、古墳時代前期の段状遺構4基、中世から近世の掘立柱建物跡1棟、集石土坑3基、道路遺構4基などを検出した。調査面積は3800m<sup>2</sup>である。

### 第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

#### 平成26年度

##### 鳥取県埋蔵文化財センター

所長	中原 齊
次長	中村 靖浩(兼総務係長)

総務係	
係長	白岩 準市
主事	松浦 広美
事務職員	坂本 真奈美、高橋 優、市村 篤則

発掘事業室	
室長	山折 雅美(兼調整係長)

調整担当	
発掘調査員	長谷 琢也
事務職員	中村ゆかり

##### 調査担当(気高調査事務所)

係長	原田 雅弘(主任発掘調査監理者)
文化財主事	坂本 嘉和(発掘調査監理者)
事務職員	竹内 努、新 ともみ

##### 支援業者

島田組・アイコンヤマト共同企業体

現場代理人：大山 徹、現場副代理人：田中武雄(7月まで)・矢部正幸(9月から)

支援調査員：野津 旭・清岡廣子、調査補助員：小泉 健・西本成希

#### 平成27年度

##### 鳥取県埋蔵文化財センター

所長	中原 齊
次長	近藤 健(兼総務係長)

総務係	
係長	白岩 準市
主事	岡 梓、水本 裕子
事務職員	坂本 真奈美、高橋 優
事務職員	植木 朋子

発掘事業室  
室長 山井 雅美(兼調整係長)  
調整担当  
文化財主事 岩垣 命  
発掘調査員 平井 克知  
事務職員 坪内 恵子  
調査担当(気高調査事務所)  
係長 原田 雅弘  
文化財主事 坂本 嘉和  
事務職員 田淵 由樹子、中谷 沙織

平成28年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 齊  
次長 近藤 健(兼総務係長)  
総務係  
係長 港 浩二  
主事 水本 箱子  
事務職員 坂本 真奈美、中森 貴子、西澤 直子  
発掘事業室  
室長 松井 謙(兼調整係長)  
調整担当  
文化財主事 岩垣 命  
発掘調査員 平井 克知  
調査担当  
文化財主事 坂本 嘉和



写真1 調査前の地形(南西から)



写真2 表土剥ぎ後の状況(南西から)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

乙亥正大角遺跡が所在する鹿野町は、鳥取県東部、県庁所在地である鳥取市の西部に位置する。平成16年の鳥取市との合併以前は隣接する青谷町、気高町とともに気高郡に属し、鹿野町はその南部域にあたる。町域は東西9.1km、南北14kmで、総面積は52.83km<sup>2</sup>である。

鹿野町の地勢は、中国山地から派生した独立峰である鷲峰山(920.6m)に代表される山地と河川の浸食によって形成された谷底平野からなるが、山地が大部分を占めている。河川は鷲峰山を水源とする河内川が本流をなし、永江川や浜村川、末用川の支流が北へ派生し、逢坂谷、勝谷、宝木谷、瑞穂谷の河谷平野を開拓している。河内川は第四紀沖積世中葉まで流下していた逢坂谷から勝谷へと流れを変えたとみられ、現在では宝木・瑞穂谷を通水し、日本海へと注いでいる。沿岸部の河口付近には砂丘が発達し、日光池や水尻池などの潟湖が数多く形成されたとみられるが、その多くは干拓により現在は水田となっている。

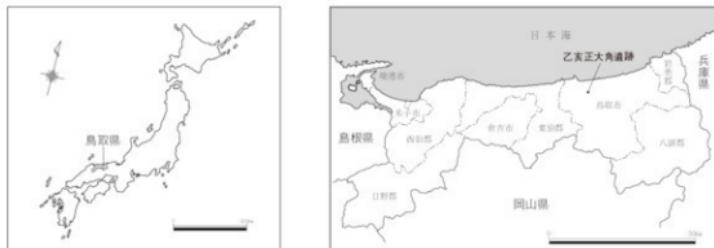
乙亥正大角遺跡は勝谷に位置し、海岸線から2.2kmほど内陸にある標高約7~21mの丘陵裾に立地する。谷底平野を挟んだ西側の丘陵には弥生時代後期を中心とする集落跡である乙亥正屋敷廻遺跡が、同一丘陵の東斜面には下坂本清合遺跡が営まれている。

### 第2節 歴史的環境

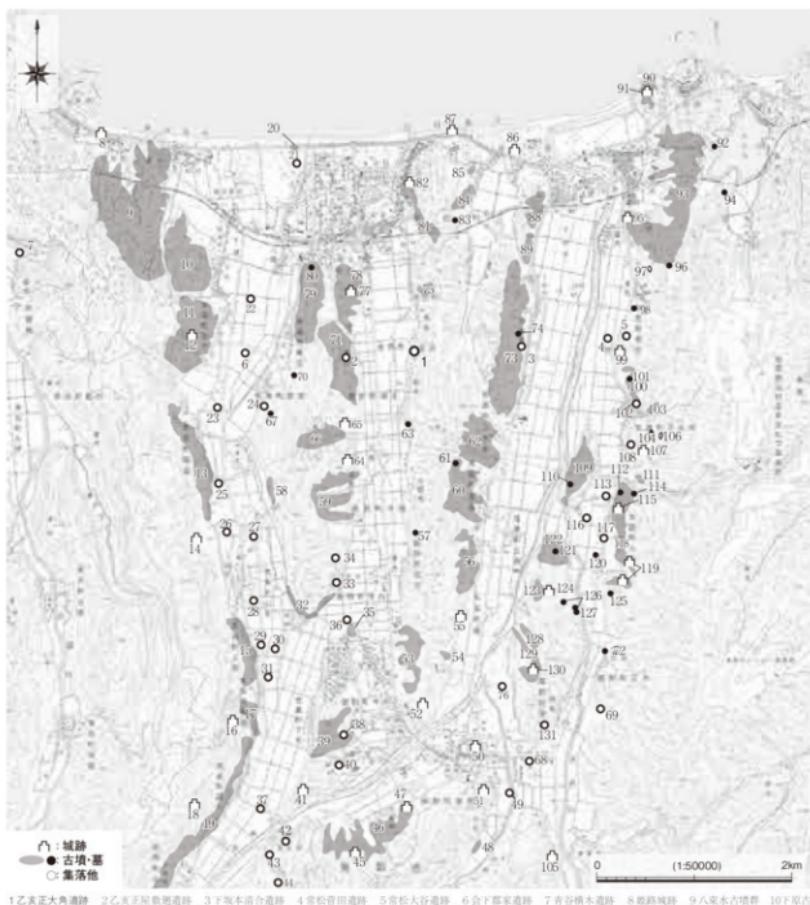
#### 旧石器・縄文時代

当該地域では旧石器時代の遺構や遺物は今のところ見つかっていない。

縄文時代は草創期では八束水の砂丘地で黒曜石製の有茎尖頭器が、閉野では局部磨製石斧が採集されている。早・前期では遺構は確認されていないが、僅かに柄杓目遺跡(76)で早期の押型文土器を確認することができる。中期では土井11号墳の調査で土坑が検出され、浜村砂丘の短尾遺跡(21)では当該期の土器が出土している。後期は山宮茶山畠遺跡(27)で土器が出土しているにすぎないが、晩期に入ると、集落や狩猟場の一端を窺うことができるようになる。山宮笛尾遺跡(26)では落とし穴や炉跡などの遺構が検出された他、黒曜石やサスカイト製石鏃、蛇紋岩製首飾りなどが出土している。常松管田遺跡(4)では焚火跡と考えられる土坑や土器溜が確認されている。



第3図 遺跡位置図



1.乙正大角遺跡群 2.乙亥王城遺跡群 3.下日本清合遺跡 4.常松管田遺跡 5.常松大谷遺跡 6.会下郡都遺跡 7.青谷横穴遺跡 8.越路城跡 9.八束水古墳群 10.下見古墳群 11.合谷古墳群 12.合下遺跡 13.高通古墳群 14.坂下遺跡 15.上原古墳群 16.山城跡 17.坂里ノ古墳群 18.風岐城跡 19.八束古墳群 20.北足利古墳群 21.尾尾野古墳群 22.合谷の古墳 23.通古墳群 24.郡家古墳群 25.壬尻城跡 26.日吉古墳群 27.中村茶畠山遺跡 28.官道古墳群 29.上見西遺跡 30.上望塚跡 31.奥山海道跡 32.田代古墳群 33.内山古墳群 34.中村古墳群 35.谷谷山古墳群 36.内山古墳群 37.中村古墳群 38.中村古墳群 39.中村古墳群 40.中村古墳群 41.中村古墳群 42.下見遺跡 43.日吉古墳群 44.日吉古墳群 45.日吉古墳群 46.日吉古墳群 47.日吉古墳群 48.日吉古墳群 49.日吉古墳群 50.日吉古墳群 51.日吉古墳群 52.西山古墳群 53.井谷古墳群 54.佐久山遺跡 55.丸山古墳群 56.上池古墳群 57.百万古墳群 58.千石古墳群 59.古河古墳群 60.重吉古墳群 61.唐松根穴墓 62.一本木古墳群 63.御前山古墳群 64.御前山城跡 65.藤山城跡 66.藤山古墳群 67.郡家ノ古墳 68.鹿野所山古墳 69.原野山古墳跡群 70.奈多ノ上横穴墓羣 71.東山古墳群 72.河野古墳群 73.坂本古墳群 74.坂本横穴 75.坂筋古墳群 76.鶴杓古墳群 77.坂本横穴 78.坂筋古墳群 79.坂本古墳群 80.谷口1号古墳 81.浜村古墳群 82.浜村城跡 83.日光古墳群 84.日光古墳群 85.日光古墳群 86.久町障壁群 87.久町障壁群 88.久町古墳群 89.久町古墳群 90.勝古墳群 91.勝古墳群 92.米沢横穴墓 93.木古墳群 94.葛見古墳群 95.吉城跡 96.富吉横穴墓 97.室松第1遺跡 98.常松第2遺跡 99.旭光城跡 100.持木横穴 102.夏ノ谷遺跡 103.夏ノ谷古墳群 104.堤谷横穴墓 105.乘寺窑跡 106.下元光第1遺跡 107.大砂城跡 108.下元光第2遺跡 109.山崎古墳群 110.山崎横穴墓 111.谷古墳群 112.谷横穴墓 113.高田遺跡 114.高田横穴墓 115.平山南城跡 116.戸島遺跡 117.馬場遺跡 118.上光古墳群 119.上城跡 120.上光ノ上古墳 121.西分横穴墓 122.西分古墳群 123.有谷古墳群 124.鈴ノ坪城跡 125.谷口横穴墓 126.熊ノ横穴墓 127.黒ノ坪1号墓 128.新集谷古墳群 129.柄谷古墳群 130.野野所山城跡 131.野野所出土地跡群

第4図 周辺遺跡分布図

## 弥生時代

遺跡周辺では弥生時代前期の遺跡はみられないが、中期から後期にかけて遺跡を多く確認することができる。常松管田遺跡では中期中葉の玉作工房跡が検出されている。玉作工房跡では北陸産の碧玉

を使用した管玉製作が行われたことが判明しており、安山岩製の石針等が出土している点も注目される。会下・郡家遺跡(6)では県内でも最大規模を持つ、独立棟持柱建物が検出されている。木棺墓群や貯蔵穴とみられる袋状土坑も数多くみられ、拠点的集落と考えられている。木棺墓は睦逢遺跡(23)や上原遺跡(30)でも確認され、上原南遺跡(31)では竪穴住居跡や貯蔵穴、土坑墓が確認されている。本遺跡と同じ勝谷に位置する乙亥正屋敷廻遺跡(2)では後期から古墳時代前期を中心とする集落が営まれている。急峻な斜面に雑壇状に段状遺構が形成されており、谷底の低地部では大規模な木造構造物を伴う水路が検出されている。また、八禽鏡の破鏡や巴型銅器等の遺物も特筆される。その他では常松大谷遺跡(5)では後期の水田跡が検出されている。

### 古墳時代

前期では前方後円墳は今のところ確認されていない。二本木7号墳(62)では長方形を呈する方墳が築かれ、方形周溝墓の可能性も指摘されている。中期になると古墳の数は増加し、大小の古墳が築造される。大型の古墳では全長47mの前方後方墳西山1号墳(89)が知られ、当該地域では最大規模を誇っている。また、八束水7号墳(9)、重高4・5号墳(60)、宝木1・16号墳(93)、上光10号墳(118)等の前方後円墳が築かれている。中小の古墳では勝見15号墳(78)で県中部に特徴的なV字状石枕を伴う箱式石棺が見つかっている。

後期から終末期では、各河谷平野に面した丘陵上に群集墳が数多く築かれようになる。気高郡域では東部と西部で墓制に違いが認められ、西部では板状に割れる安山岩を玄室奥壁に1枚、側壁に2枚、天井石に2枚使用する「逢坂型石室」と呼ばれる横穴式石室が、東部では横穴墓が主体的に築かれる。前者では谷奥1号墳(80)が傑出した副葬品を有しており、銅鏡、金環、直刀の装具に加え、馬鐸や銅椀が出土している。線刻壁画をもつ古墳も多く、山宮14号墳や睦逢11号墳(13)、殿15・25号墳(19)等が挙げられ、漆谷横穴墓では(61)では綾杉文の線刻が確認されている。

古墳時代の集落については不明な点が多いが、会下郡家遺跡では前期から中期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。また、常松菅田遺跡や常松大谷遺跡では後期から終末期にかけて、礎盤や根石等をもつ掘立柱建物群が営まれており、平野の低地部にも集落が形成されたことが窺える。

### 古代

律令制下では因幡国気多郡に属する。『和名類從抄』によると、気多郡は大原、坂本、口沼、勝見、大坂、日置、勝部の7郷で構成される。気多郡衙は発掘調査により上原遺跡群に置かれたことが確實とみられる。上原遺跡群では長大な掘立柱建物群や廂付建物が整然と並び、郡庁、正倉、曹司などの各施設が南北500m、東西300mに及ぶ範囲に分散して営まれたと考えられている。山宮阿弥陀森遺跡(28)では「郡家一」と記された墨書き器なども出土している。上原遺跡群から北東約800mの位置には寺内庵寺(33)が造営され、郡衙周辺寺院として「郡寺」の性格も有していた可能性が高い。ただし、塔心礎が確認されたのみで、伽藍配置等の詳細は明らかではない。

気多郡では郡衙より下位とみられる官衙関連遺跡が複数確認されている。まず、戸島・馬場遺跡は郡東部に置かれた郡衙の出先機関と考えられている。馬場遺跡(117)では8~10世紀の長大な掘立柱建物や倉庫群が検出され、隣接する戸島遺跡(116)では7世紀末頃の布堀掘立柱建物がコの字状に整然と配置されている。一方で、郡西部では近年調査された青谷横木遺跡周辺に日置・勝部郷を統括す

るような末端官衙が置かれた可能性が高まっている。青谷横木遺跡(7)では青谷上寺地遺跡と同様に古代山陰道とみられる道路遺構と条里遺構が一体で確認され、税や出舉に関する木簡や墨書き土器、人形や馬形など膨大な量の木製祭祀具が出土している。

その他では、睦逢遺跡では倉庫群を含む掘立柱建物が検出されており、豪族居宅としての性格が考えられている。また、会下郡家遺跡では10~11世紀の大型建物群が検出され、綠釉・灰陶釉陶器が出土するなど、気多郡衙廢絶後における官衙関連施設としての性格や機能が注目されている。

平安末頃には末法思想により各地に經塚が造られるようになり、当地域では勝見經塚(勝見15号墳)(132)が知られる。經塚内に經筒は残っていなかったが、陶製(土師質)の外容器が出土し、「藤井□□ 慈舟造候也」という墨書銘が記されている。



第5図 勝見15号墳經塚外容器

## 中・近世

中世では会下郡家遺跡で掘立柱建物跡や地下式横穴が数多く確認され、中国や朝鮮半島産の陶磁器等の出土から屋敷地が存在したとみられる。また、室町時代中期とみられる銅製の仏具(香炉、葦瓶、燭台等)が一式出土している。中世墓では寺内廐寺跡で備前焼の藏骨器を含む土壙墓群が検出され、周辺からは宝篋印塔や五輪塔が多数出土している。

戦国時代には尼子氏と毛利氏の勢力争いや羽柴秀吉の因幡進出などを背景に、勝山城(77)や観音山城(64)、富吉城(95)などの山城が数多く築かれている。鳥取城の落城後は、亀井茲矩が氣多郡13,800万石を与えられ、鹿野城(51)に入城した。亀井氏は新田開発のための日光池の干拓や青谷町平野における亀井畠の敷設など大規模な土木事業を積極的に行うとともに、東南アジアとの朱印船貿易にも力を注いだ。元和3年(1617年)、亀井氏が石見津和野藩に移封された後は池田光政領となり、寛永9年(1632年)の光仲の国替えを経て、以後幕末まで鳥取藩領となった。

### 【参考文献】

気高町教育委員会編1977『気高町誌』

鹿野町教育委員会編1995『鹿野町誌』上巻

\*発掘調査報告書類については紙面の都合上割愛させていただいた。

### 【図出典】

第5図：気高町教育委員会1978『勝見15号墳発掘調査報告書』

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

#### 1 遺跡の立地と基本層序(第6~10図)

乙亥正大角遺跡は、気高平野を構成する三本の河谷平野のうち勝谷に位置し、浜村川下流域の東岸に所在する。遺跡が営まれた丘陵は東側の瑞穂谷との間に残された標高132m程の細長い低丘陵で、北側は日本海まで張り出しているが、南端は鷲峰山との間が河内川の開析により遮断されることで、独立した山帯をなしている。

調査地は丘陵裾に位置し、斜面部と斜面裾から平野部の平坦面に分けられる。標高は7~21m前後で、調査地内で最大約14mの比高差がみられる。丘陵斜面は比較的急峻であるが、小規模な開析谷にあたるため、周間に比べやや緩やか地形をなしている。調査前の現況は、階段状に耕作地が造成され、調査地内の各所に耕作などに伴って出土した転石が数多く集積されていた。

本遺跡の土層堆積は、基本的に第三紀の白兎円礫層と呼ばれる、安山岩～デイサイトや凝灰角砾岩、凝灰岩、火山円礫からなる火山碎屑岩を基盤とし、上部を大山のローム層やその二次堆積層が厚く覆っている。とくに調査地は前述したように開析谷にあたるため、丘陵裾から平野部にかけて二次堆積



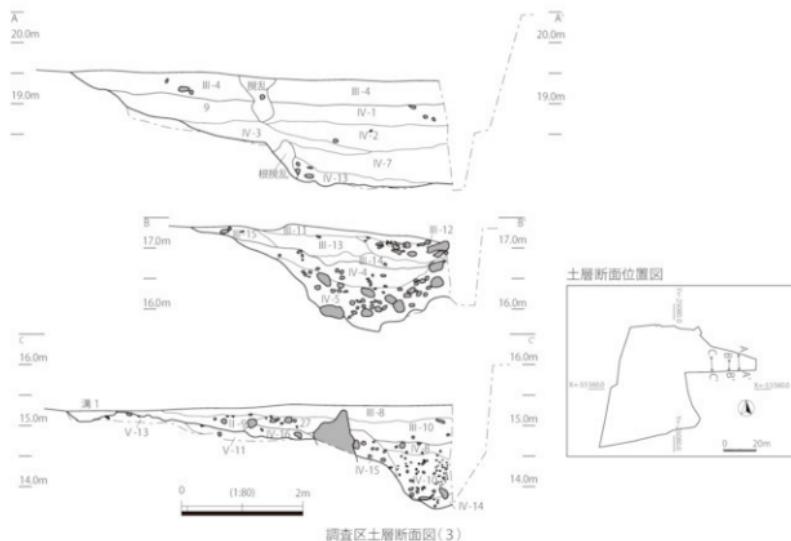
第6図 調査前地形測量図



第7図 調査区中央土層断面図(1)

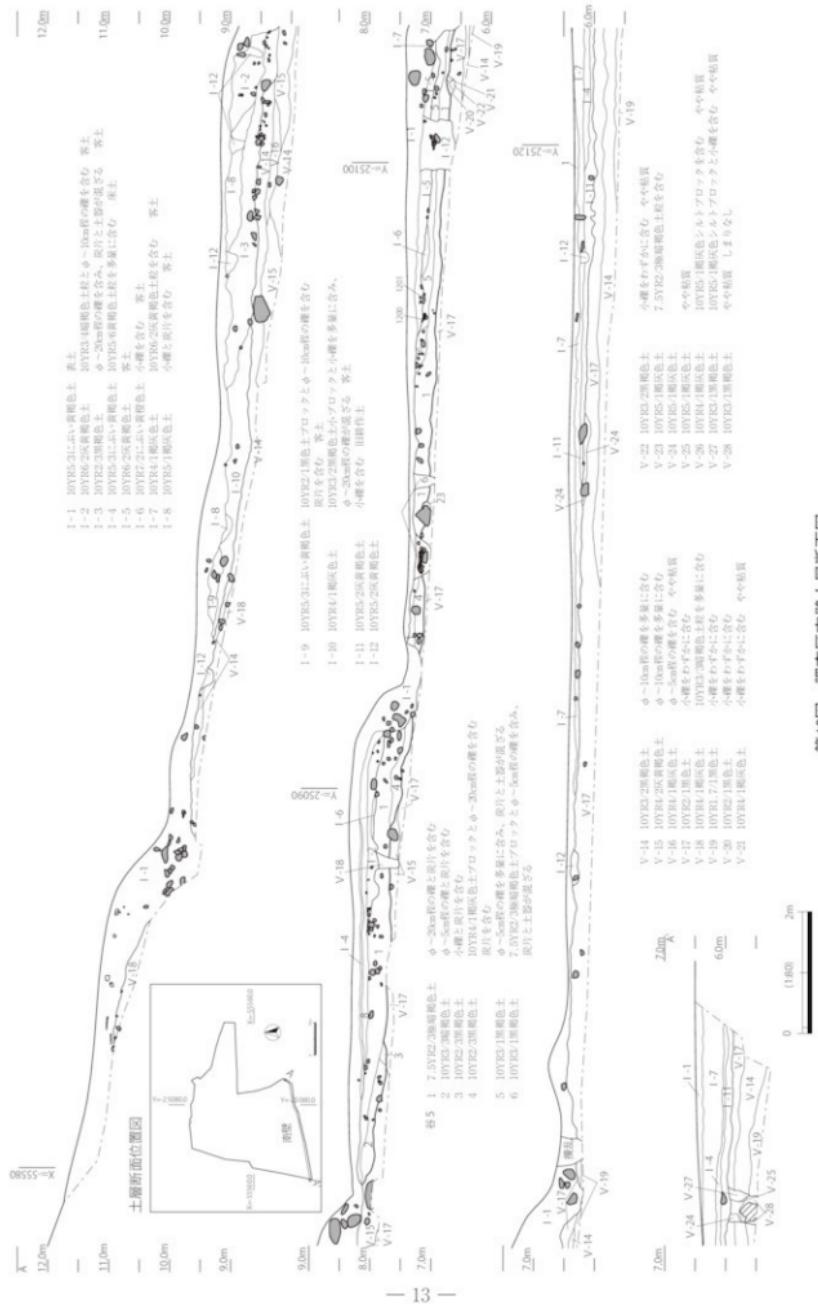


第8図 調査区中央土層断面図(2)



- |        |              |   |
|--------|--------------|---|
| III-1  | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-3cmの礫を少量化含む 地核を少量含む                    |
| III-2  | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cmの礫を少量化含む 地核を少量含む                    |
| III-3  | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cmの礫を少量化含む 地核を少量化含む III-2よりしまり強       |
| III-4  | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cmの礫を少量化含む 地核を少量化含む III-3より色調が暗くに明るい  |
| III-5  | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の大きめの礫をまばらに含む 地核を少量化含む III-5より粘性強 |
| III-6  | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-11cm径の大きめの礫をまばらに含む 地核を少量化含む            |
| III-7  | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-30cm径の礫を多量に含む 地核を少量化含む                 |
| III-8  | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-3cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                  |
| III-9  | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-10cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                 |
| III-10 | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-10cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                 |
| III-11 | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-2cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                  |
| III-12 | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-20cm径の礫を多量に含む 地核を少量化含む                 |
| III-13 | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                  |
| III-14 | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                  |
| III-15 | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-10cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む III-13よりしまり強    |
| III-16 | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を含む 粘性やや強                       |
| N-1    | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-20cm径の大きめの礫を多く含む N-1よりしまり強             |
| N-2    | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cm径の礫を多く含む N-2よりしまり強                  |
| N-3    | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cm径の礫を多く含む N-3よりしまり強                  |
| N-4    | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を多く含む 地核を多く含む                   |
| N-5    | 10YR2/4暗褐色土  | φ10-20cm径の礫を多く含む φ60cmを超える礫も多い            |
| N-6    | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を多く含む N-6を超える礫も多い               |
| N-7    | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫をまばらに含む IV-2よりしまり強              |
| N-8    | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を少量化含む 地核を少量化含む                 |
| N-9    | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を多く含む 地核を少量化含む                  |
| N-10   | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を少量化含む                          |
| N-11   | 10YR2/4暗褐色土  | φ1-5cm径の礫を含む 地山の黒色土をブロック状に含む 粘性やや強        |
| N-12   | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を含む 地核を少量化含む                    |
| N-13   | 10YR2/3暗褐色土  | φ1-15cm径の礫を含む 地山の黒色土をブロック状に含む             |
| N-14   | 10YR2/3暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を少量化含む 地山の黒色土をブロック状に含む          |
| N-15   | 10YR2/4暗褐色土  | φ5-10cm径の礫を多く含む N-10よりしまり強                |
| N-16   | 10YR2/3暗褐色土  | φ1-10cm径の礫を少量化含む 地山の黒色土ブロックをわずかに含む 30cm類似 |
| V-1    | 10YR2/1黑色土   | 小礫を含む                                     |
| V-2    | 10YR2/2黑色土   | φ1-5cm径の礫を含む                              |
| V-3    | 10YR4/1褐色赤色土 | 小礫を多く含む やや粘質                              |
| V-4    | 10YR2/1黑色土   | φ-10cm径の礫を含む                              |
| V-5    | 10YR2/3黑色土   | φ-15cm径の礫を多く含む                            |
| V-6    | 10YR1/7.1黑色土 | φ-30cm径の礫を含む                              |
| V-7    | 10YR2/2黑色土   | φ-15cm径の礫を多く含む                            |
| V-8    | 10YR3/1黑色土   | φ-10cm径の礫を多く含む                            |
| V-9    | 10YR2/1黑色土   | φ-5cm径の礫を含む                               |
| V-10   | 10YR4/2灰褐色土  | φ-5cm径の礫を多量に含む                            |
| V-11   | 10YR3/2黑色土   | φ-10cm径の礫を多く含む                            |
| V-12   | 10YR2/3黑色土   | φ-10cm径の礫を多く含む                            |
| V-13   | 10YR4/4褐色土   | φ-10cm径の礫を含み、φ60cmを超える大礫も混じる              |

第9図 斜面部土層断面



第10図 調査区南壁土層断面図

層が厚く堆積する。一方で、斜面部は後世の耕作や流出が著しく、北半部分では表土直下に白兎円碟層が露出してしまっている。

基本層序についてはすべてに通し番号の層名を付しており、以下に各層の特徴を示す。

**I層**：表土、もしくは耕作土で、近現代の造成土も当層に含めている。

**II層**：暗褐色土(10Y R3/4)。斜面部の埋没谷(谷1)のみに堆積する、近世の遺物包含層である。ローム層を母材とする流土堆積で、15層に細分される。小碟を含む層もあるが、III・IV層に比べ粒径が小さい。層厚は最大で80cmを測る。II層堆積範囲ではその下面が第1遺構面となり、時期は中・近世と考えられる。

**III層**：暗褐色土(10Y R3/4)。II層と同様に斜面部の谷にのみ堆積する、古墳時代後期から古代の遺物包含層である。ローム層を母材とする流土堆積で、16層に細分される。基盤層に由来し、径5~10cmを中心とする亜角碟を多く含んでいる。層厚は最大で1mを測る。

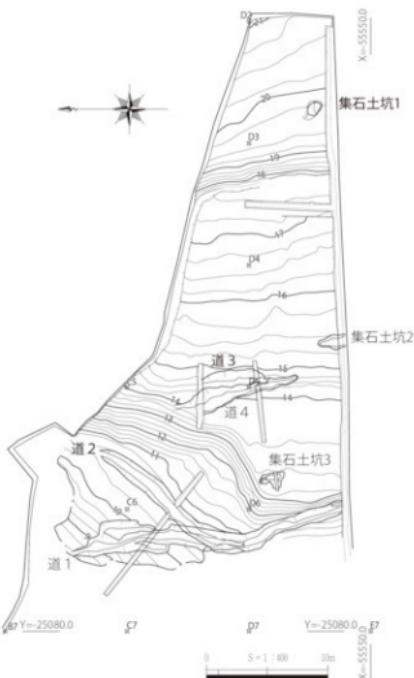
**IV層**：暗褐色土(10Y R3/3~3/4)。II・III層と同様に斜面部の谷にのみ堆積する、古墳時代前期から後期の遺物包含層である。ローム層を母材とする流土堆積で、16層に細分される。径5~20cmを中心とする亜角碟を多量に含み、一抱え以上の巨石も流入している。層厚は最大で1.1mを測る。IV層堆積範囲ではその下面が第2遺構面となり、時期は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

**V層**：黒色土(10Y R2/1)~褐色土(10Y R4/4)。無遺物層で、地山である。ローム層やクロボクを母材とする、流土堆積である。薄層が互層状に堆積しており、26層まで確認している。各層とも亜角碟を一定量含んでいる。

## 2 調査結果の概要

乙亥正大角遺跡では、縄文時代から近世に至る幅広い時期の遺構や遺物が確認された。なかでも弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては斜面を造成した段状遺構に掘立柱建物が確認され、当該期の土器が出土遺物の大半を占めるなど、周囲には丘陵上や斜面を中心に当該期の集落が営まれたと考えられる。また、中世から近世にかけての出土遺物もやや目立ち、各遺構の性格を具体的に示すことはできないが、平坦部は屋敷地、斜面部は墓地としての土地利用が窺える。

遺跡全体としての遺構密度は低く、出土遺物も少ない。



第11図 第1遺構面遺構配置図



第12図 第2遺構面遺構配置図

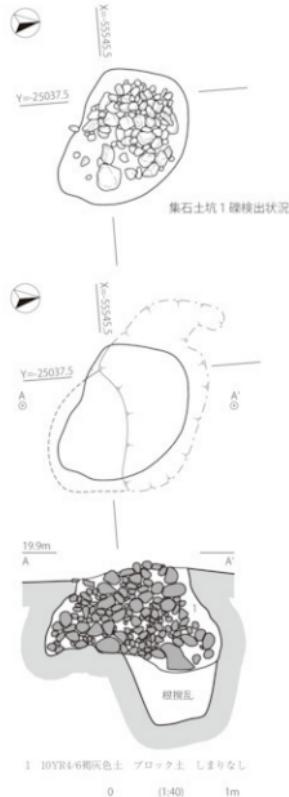


## 第2節 第1遺構面

### 1 概要

第1遺構面は、調査区東側の斜面部のみで確認し、古墳時代後期の包含層であるⅢ層上面が遺構検出面となる。斜面部には狹小な谷筋(埋没谷1)が入り込んでおり、埋没谷1が完全に埋没した後に形成された緩斜面を利用して遺構が築かれている。

検出した遺構は、集石土坑3基、道路遺構4基である(第11図)。遺構の時期は出土遺物が僅少であるため明確でないが、いずれも近世以降に帰属する可能性が高い。集石土坑2、3は構造や特徴が類似することから同一の性格を想定しうるが、性格は不明である。道路遺構は素掘りの溝のみの、いずれも簡素なつくりである。丘陵裾から斜面を横切り、延伸することから山道としての性格が考えられる。調査地内やその周辺では五輪塔が数多く点在し、少なくとも近世以降は墓地としての土地利用が考えられることから、平野部に位置する集落から墓地へと通じる道であった可能性もある。

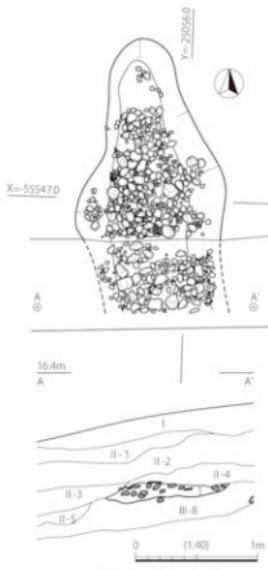


第13図 集石土坑1

### 2 集石土坑

#### 集石土坑1(第13・16図 PL.3-1・2、18)

D2グリッド、標高約19.7mの斜面部に位置する。平面形はやや歪な楕円形で、断面形はフラスコ状を呈す。規模は長軸1.28m、短軸0.91m、深さ0.85mを測る。底面の最大径は1.43mである。北側底部は樹木根の搅乱を大きく受けている。



第14図 集石土坑2

埋土は褐色土の単層で、遺構内に多量の亜角礫が充填されている。礫は径50cmを超えるものもあるが、ほとんどが径15cm以下の拳大から掌大のものが主体を占める。壁面に石組のような構築物は確認できない。出土遺物は青磁碗(1)が出土している。詳細な時期は特定できないが、埋土の状況等から、近世に帰属する可能性が高い。遺構の性格は不明である。

#### 集石土坑2(第14図 PL3-3)

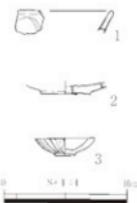
D4グリッド、標高約15.4~15.5mの斜面部に位置する。遺構の南半は調査区外の南側に延びる。10m程離れた位置にある土坑3と遺構の規模、礫の充填状況が類似している。平面形は土坑、もしくは溝状で、断面は皿状を呈する。規模は長軸2.26m以上、短軸1.20m、深さ0.14mを測る。埋土は暗褐色土で、しまりはやや強い。遺構内には径10cm以下の小礫が多量に敷き詰められている。溝状に延伸すれば、石敷の道路遺構の可能性もあるが、明確にしえない。遺物は出土せず詳細な時期は特定できないが、検出層位から近世に帰属する遺構と考えられる。

#### 集石土坑3(第14図 PL4-1)

D5グリッド、標高約13.4~13.5mの斜面部に位置する。10m程離れた位置にある集石土坑2と類似し、関連性の高い遺構と考えられる。平面形は不整形で、断面形は浅い皿状を呈す。規模は長軸2.19m、短軸0.77~1.56m、深さ0.07mを測る。褐色系の埋土で、しまりはやや強い。遺構内には径10cm以下の小礫が多量に敷き詰められた状態で出土している。遺物は出土せず詳細な時期は特定できないが、検出層位から近世に帰属する遺構と考えられる。



第14図 集石土坑3



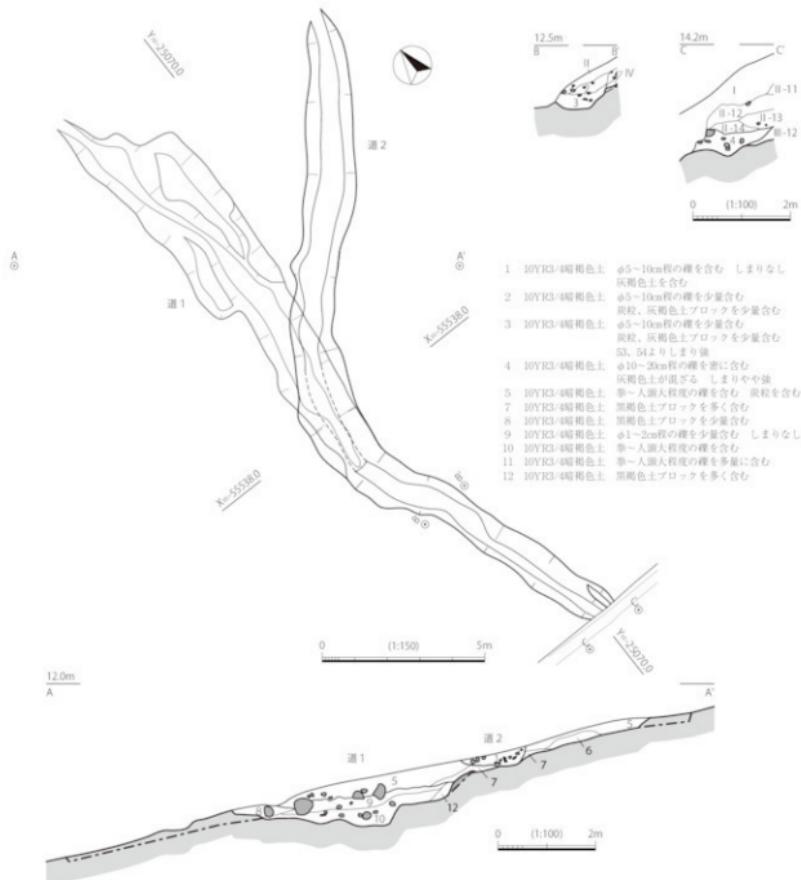
第15図 集石土坑1・道1出土遺物

### 3 道路遺構

#### 道1・2(第16・17図 PL4-2・3、12-1・2)

B5・6、C5・6、D5・6グリッド、標高約8.3~12.2mの斜面裾部から平坦部かけて位置する。道1・2は重複関係にあり、道1から道2へと変遷する。古段階の道1が調査区中央壁から北北西方向に斜面下方へほぼ直線状に下っていくのに対して、新段階の道2は途中で屈曲し、斜面裾の地形に沿うように掘削されている。

道1・2とも素掘りの溝のみで、簡素なつくりである。検出した長さは約22mで、道1では幅0.95~2.65m、深さ0.42m、道2では幅0.96~1.83m、深さ0.36mを測る。埋土はしまりの強い暗褐色土で拳大から人頭大の礫を多く含む。溝底面では一定せず、図示していないが、部分的に硬化している部分も確認できた。遺物は土器、陶磁器片が僅かに出土している。2は土師器皿、3が磁器の紅皿である。詳細な時期は特定できないが、斜面を登下する近世以降の山道としての性格が考えられる。

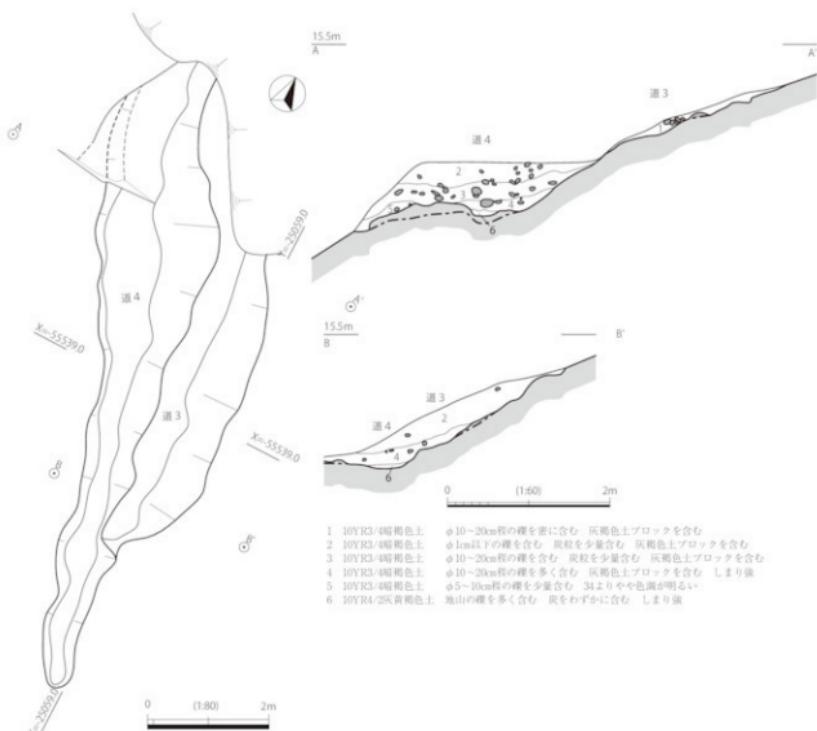


第17図 道1・2

## 道3・4(第18図 PL5-1)

C4・5、D4・5グリッド、標高13.5~14.8mの斜面部に位置する。道路遺構4はテラス4に重複し、テラス4を切っている。道3、4は重複関係にあると考えるが、土層断面では同一の埋土で埋没しており、先後関係は明らかにしえない。

道3・4とも素掘りの溝のみで、簡素なつくりである。道3は長さ8.00mではば南北方向に延び、最大幅1.38mで、深さ0.16mを測る。道4は長さ10.44mで道3よりやや西方向に振り、最大幅2.06m、深さ0.24mを測る。埋土はいずれも暗褐色土で、径10~20cmの礫を多く含んでいる。道4の最下層にあたる6層はしまりが強く、硬化面を形成している。遺物は陶磁器片が僅かに出土しているが、詳細な時期は特定できない。斜面を登下する近世以降の山道と考えられる。



第18図 道3・4

### 第3節 第2遺構面

#### 1 概要

第2遺構面は、無遺物層(地山)であるV層上面が遺構検出面となる。遺構は調査区全体に及ぶが、散漫な分布状況を示す。古墳時代前期のテラス4基、土坑1基、中世の土坑1基、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑4基を検出した他に埋没谷5カ所を確認した(第12図)。遺物は古墳時代前期の土器が多く出土しており、とくに、斜面部では当該期の段状遺構が雛壇状に構築されていた可能性が高い。平野部を挟んだ西側には弥生時代後期から古墳時代前期の拠点的集落と考えられる乙亥正屋敷廻遺跡が位置しており、本遺跡はその周間に営まれた小規模な集落とみることができる。

#### 2 段状遺構

##### テラス1(第19図 PL 7-1)

D2グリッド、標高19.0~19.8mの斜面部、埋没谷1へ下る南西斜面に位置する。テラス2と重複し、テラス2に先行する。地山を削り出し平坦面を造成しているが、平坦面の大部分は埋没谷1の堆

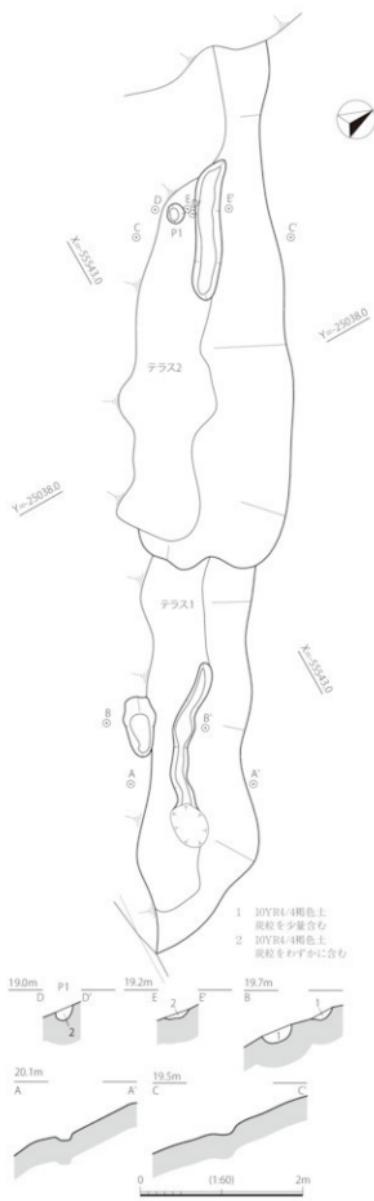
積によって流出し遺存していない。規模は長さ4.36m、幅0.43~0.76mを測る。平坦面ではピット1基と溝1条を検出している。P1は長軸0.74m、短軸0.40m、深さ0.16mを測る。埋土は褐色土の単層で、柱痕跡等は確認できない。溝は壁際に沿うように検出されており、部分的ながら周壁溝と考えられる。規模は長さ1.77m、幅0.18~0.28m、深さ0.06mである。出土遺物は、埋土中から土師器の細片が出土しているが固化し得なかった。検出層位や出土遺物から帰属時期は古墳時代前期と考えられる。

#### テラス2(第19図 PL 7-1)

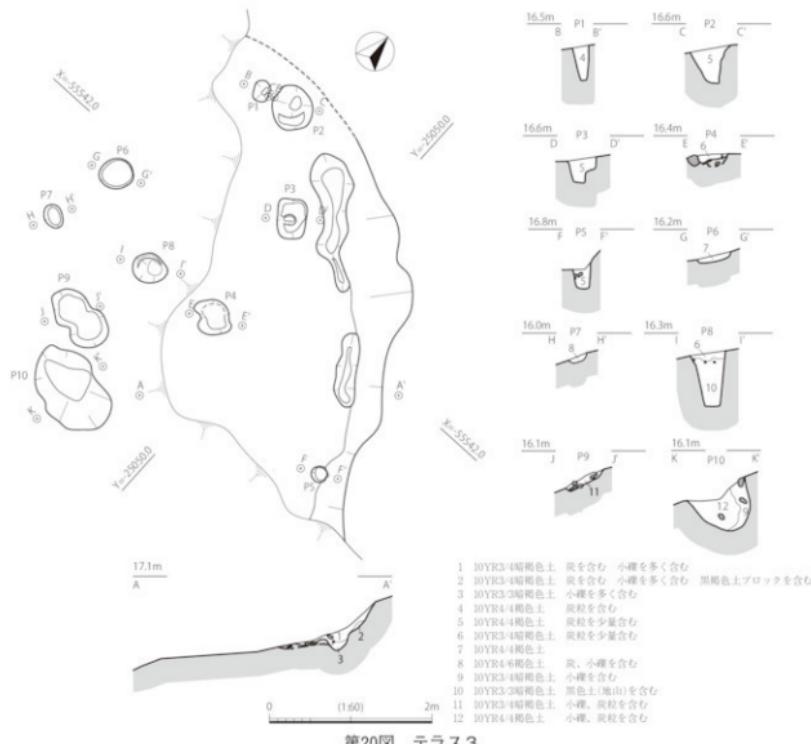
C2・D2・3グリッド、標高18.6~19.5mの斜面部、谷へ下る南西斜面に位置する。テラス1と重複し、テラス1に後出する。埋没谷1の堆積によって平坦部の遺存状況が極めて悪い。規模は長さ4.48m、幅0.74~1.20mを測る。平坦面ではピット1基と溝1条を検出している。ピットは径0.21~0.24m、深さ0.16mを測る。埋土は褐色土で、柱痕跡等は確認できない。溝は壁面に沿って延びており、部分的ながら周壁溝と考えられる。規模は長さ1.74m、幅0.30m、深さ0.07mである。遺物は出土していない。埋土がテラス1と類似することや検出層位から、古墳時代前期の段状遺構と考えられる。

#### テラス3(第20図 PL 7-2)

C4、D3・4グリッド、標高16.1~16.7mの斜面部に位置する。南側は埋没谷1によって流出し遺存していない。平面形は弧状で、規模は長さ6.00m、最大幅2.38mを測る。テラス平坦面及び周辺でピット8基、土坑2基、溝2条を検出している。溝2条は壁際に位置し、部分的ながら周壁溝と考えられる。溝の幅は0.13~0.50mで、深さ0.03~0.18mである。ピットは径0.22~0.56m、深さ0.08~0.68mと規模にはばらつきがあり、配列からも上屋は復元できない。埋土も褐色土の単層のものが多く、柱痕跡等は確認できない。遺物は土師器の細片が出土しているが、固化し得なかった。検出層位や出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる。



第19図 テラス1・2



テラス4(第21図 PL 8-1)

C5・D4・5グリッド、標高13.4~14.0mの斜面部に位置する。南側は埋没谷1によって流出し、壁面の大部分は道3・4によって切られている。規模は長さ10.9m、最大幅3.25mで、比較的広い平坦面が造成されている。平坦面では桁行2間(2.95~3.70m)、梁行1間(1.60~2.35m)の掘立柱建物跡が検出されている。N-4°-Wの南北棟で、平面積は5.27m<sup>2</sup>を測る。柱間寸法は1.45~2.35mとかなりばらつきがある。柱穴は径0.3~0.45mの円形を呈し、深さは0.27~0.46mと底面レベルは一定しない。柱痕跡も明瞭に確認できない。その他柱穴以外にも6基のピットが検出されている。遺物は土師器の細片が出土しているが、図化し得なかった。

検出層位や出土遺物から帰属時期は古墳時代前期と考えられる。

### 3 掘立柱建物跡

#### 掘立柱建物1(第22図 PL 8-2~4、20-1)

C9グリッド、標高5.9~6.1mの平坦部に位置する。桁行2間(3.7~3.8m)以上、梁行1間(2.4~2.5m)の東西棟である。方位はN-80°-Wで、平面積は9.5m<sup>2</sup>以上である。柱掘方は直径0.25~



第21図 テラス4

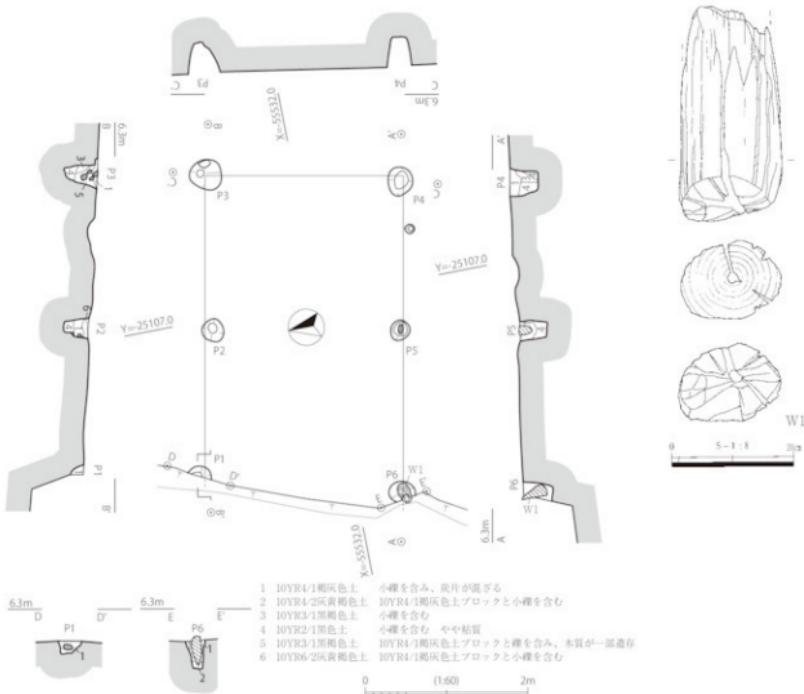
0.40mの円形で、深さは最大で0.41mを測る。P 5・6には柱材が遺存しており、遺存状態の良いP 6 W 1の柱径は14cmである。P 3にも柱材の一部とみられる木質が遺存していた。柱穴埋土は黒色から褐色系で小礫を含んでおり、いずれの柱穴にも炭片を含む褐灰色のブロック土が混ざる。遺物はP 5・6から土師器細片が僅かに出土しているが、遺構の時期を示すものではない。

出土遺物から建物の時期を特定できないが、W 1について放射性炭素年代測定したところ、 $2\sigma$ 曆年代範囲で1307calAD-1363calAD(70%)という結果が得られており、14世紀頃の建物跡と考えられる。

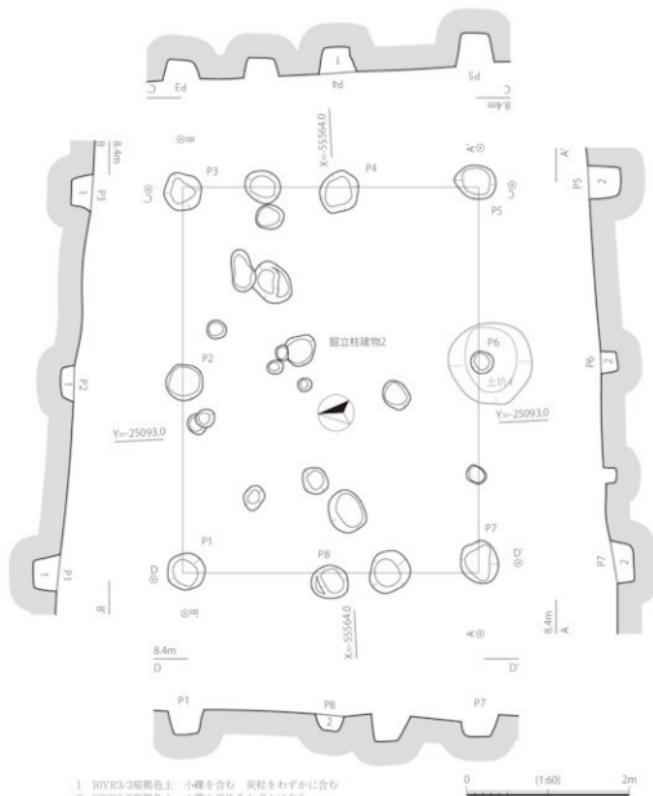
#### 掘立柱建物2(第23図、PL 9-1)

F 8グリッド、標高7.6~8.2mの平坦部に位置する。P 6は土坑4と重複し、土坑6に後出す。桁行2間(4.7m)、梁行2間(3.6m)の東西棟である。方位はN-88°-Eで、平面積は16.92m<sup>2</sup>を測る。柱掘方は径0.28~0.53mの円形で、深さは最大で0.40mを測る。柱穴埋土は黒褐色、もしくは暗褐色の単層で、小礫と炭片を含んでいる。

P 6を除く各柱穴から須恵器、土師器の細片が出土しているが、遺構の時期を示すものではない。建物の時期は詳細に特定できないが、土坑との重複関係から古墳時代以降と考えられる。



第22図 掘立柱建物1



第23図 挖立柱建物2

#### 4 土坑

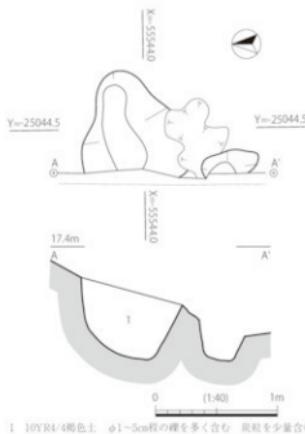
##### 土坑1(第24図)

D 3 グリッド、標高17.0mの斜面部に位置する。西側はトレンチにより遺存していない。平面形は長軸1.22m、短軸0.88mの不整形を呈する。検出面からの深さは0.54mを測る。埋土は褐色土の単層で、遺物は出土していない。

遺構の時期、性格とも不明である。

##### 土坑2(第25図 PL9-2)

D 6・7 グリッド、標高9.2~10.8mの丘陵裾の緩斜面に位置する大土坑である。斜面下方の遺構西端は削平され遺存していない。平面形はやや歪ながら椭円形を呈し、規模は長軸8.18m、短軸3.86mを測る。検出面から深さは最大0.5m測り、遺存状態の最も良い北壁は一部、オーバーハングする箇所が見られる。埋土は褐色系の単層である。底面からピットが5基確認されているが、本土坑に伴うものかは不明である。遺物は固化し得なかったが、青磁などの陶磁器や土師器の細片が僅かに出土



第24図 土坑1

している。

出土遺物から中世に帰属する遺構と考えられるが、性格は不明である。

#### 土坑3(第26図 PL9-3)

D 8 グリッド、標高7.1mの平坦部に位置する。平面形は長軸1.50m、短軸1.04mのやや歪な楕円形で、検出面からの深さは最大で0.44mを測る。埋土は黒褐色の単層で、炭片を含んでいない。底面には大型の礫が落とし込まれている。埋土中から土師器、須恵器の細片が僅かに出土した。遺構の時期は不明である。

#### 土坑4(第27図)

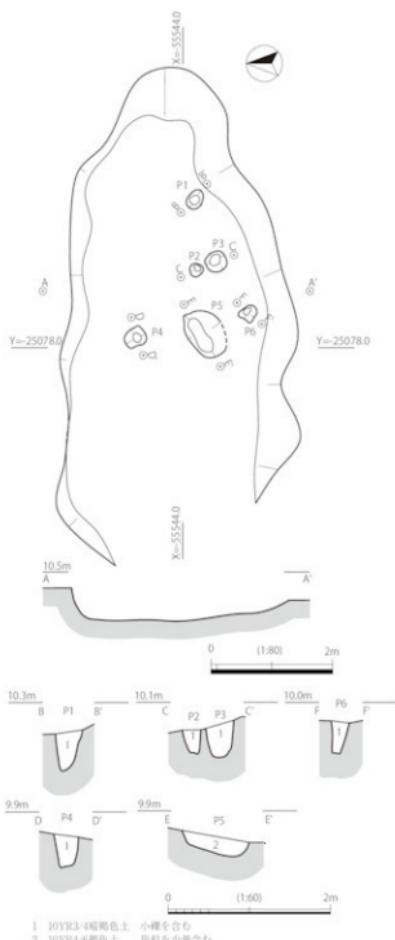
F 8 のグリッド、標高7.8mの平坦部に位置する。掘立柱建物 2 P 6 と重複し、掘立柱建物 2 に先行する。

平面形は径1mの円形で、検出面からの深さは最大で1mを測る。埋土は9層に分けられ、上層、中層、下層に大別することができる。上層は黄褐色系で炭片を含み、中層と下層は黒色から暗褐色系で径15cm以下の礫を含んでいるが、下層は粘質が強くなり、さらに下層の下位には砂粒を多く含んでいる。遺物は埋土中から弥生土器、土師器の細片が出土している。

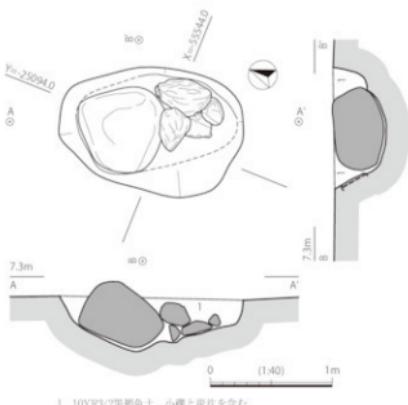
最下層に小礫と砂粒を多く含み、湧水が見られることから、井戸であった可能性も考えられる。遺構の時期は詳細に特定できないが、古墳時代前期以前の可能性がある。

#### 土坑5(第28図)

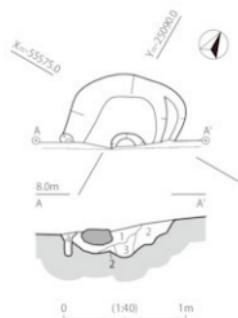
G 7・8 グリッド、標高7.6~7.8mの平坦部に位置する。南側はトレンチ掘削により消失しており、



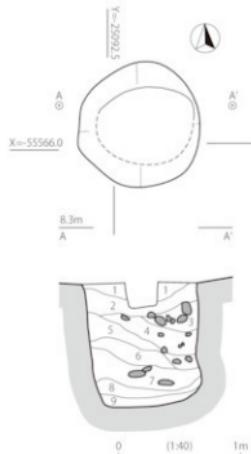
第25図 土坑2



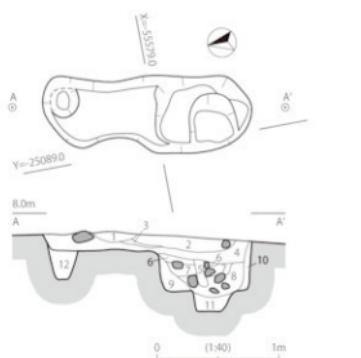
第26図 土坑3



第27図 土坑5



第28図 土坑6



第29図 土坑6

南西隅に後世の杭痕跡が認められる。平面形は長軸0.96m、短軸0.6m以上の橢円形と考えられ、検出面からの深さは最大で0.24mを測る。埋土は黒色から黒褐色系を主体に3層に分けられ、地山ブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

性格、時期ともに不明である。

## 土坑6(第29・30図 PL10-1)

G7グリッド、標高7.7mの平坦部に位置する。埋没谷5の埋土掘り下げ中に検出した遺構である。埋土の堆積状況から少なくとも2基の土坑が重複していると考えられる。北側底面でピット群3に含まれるピットを検出している。

古段階の平面形は、長軸0.76m以上、短軸0.64mの橢円形で、検出面からの深さは最大で0.60mを測る。段状に掘り込まれており、埋土は黒褐色系を主体に7層に分けられ、粘性が強く、10cm以下の礫を含んでいる。新段階の平面形は、長軸1.70m、短軸0.46mの歪な隅丸長方と考えられ、検出面からの深さは最大で0.20mを測る。埋土は褐灰色系を主体に4層に分けられ、古段階と同様に礫を含むが粘性は弱い。

古段階の埋土から銅製品(B1)が出土している。飾金具とみられ、中央に釘穴があり、その周間に猪目文様の透かしが巡る。出土遺物から中・近世に帰属する遺構と考えられるが、性格は不明である。

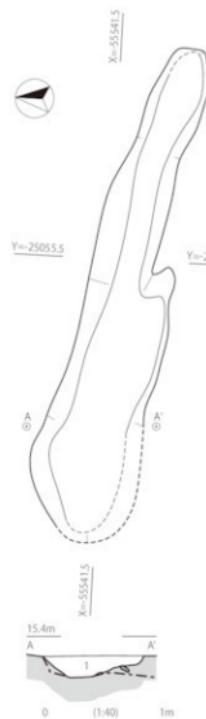
## 5 溝状遺構

## 溝1(第31図)

D4グリッド、標高15.0~15.7mの斜面部に位置する。長さは4.12mで、ほぼ東西方向に延びており、幅0.39~0.79m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色土で、径1cm以下の礫、灰褐色土ブロックを含む。土層断面では確認できなかったが、溝中央部から北西部で幅が急に拡幅する部分がみられ、2条の溝が重複している可能性もある。出土遺物はないが、埋土や周辺の遺構検出状況から古墳時代前期の遺構の可能性がある。

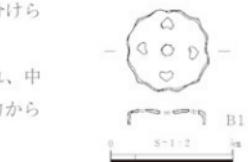
## 溝2(第32図)

D4グリッド、標高15.1~15.6m斜面部に位置する。長さは2.78mで、ほぼ東西方向に延びており、幅0.70~0.94m、深さ0.20mを測る。埋土は褐色土で、径2cm以下の礫が多く、炭粒を少量含む。出土遺物はないが、埋土や周辺の遺構検出状況から古墳時代前期の遺構の可能性がある。

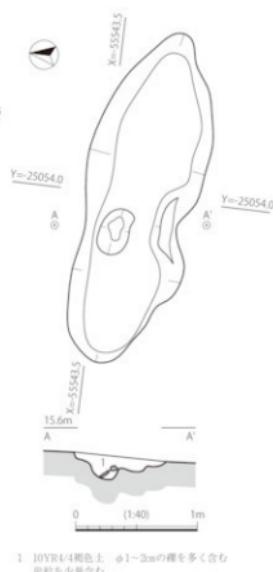


1 10YR4/4暗褐色土 φ1cm以下の礫を少量含む  
灰褐色土ブロックを含む

第31図 溝1



第30図 土坑6出土遺物



1 10YR4/4暗褐色土 φ1~2cmの礫を多く含む  
灰褐色土ブロックを含む

第32図 溝2

## 6 ピット群

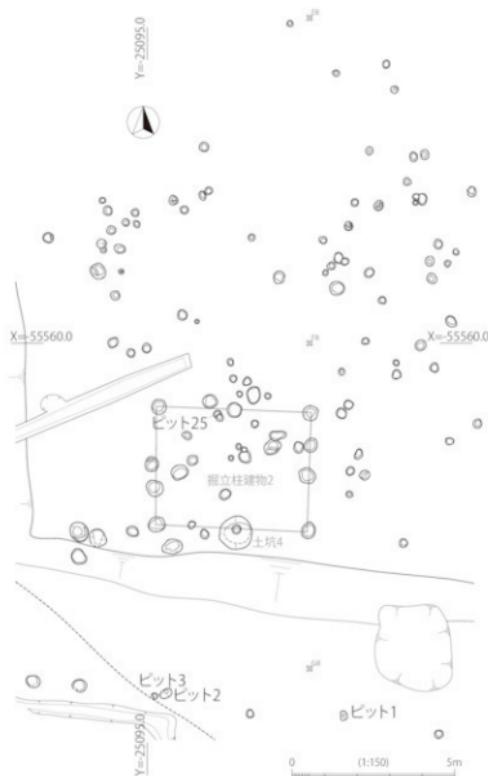
調査区平坦部のほぼ全域で建物に復元できない、数多くのピットを検出している。ここではピットが集中していた箇所をピット群1、ピット群2、ピット群3として記載する。柱材、もしくは杭材が遺存するものが多く、放射性炭素年代測定に依拠すれば、中世を通じて建物や何らかの構築物が存在していた可能性が高い。

### ピット群1(第33・35図 PL10-2, 20)

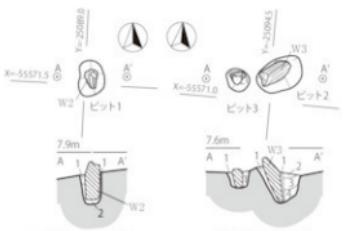
調査区中央付近、E 7・8、F 7・8 グリッドの東から西に向けて舌状に延びる標高7.2~8.6mの緩斜面に位置する。総数110基程度のピットからなる。

掘方は大半が円形もしくは楕円形を呈する。規模は最大で長軸0.64mを測るが、平均すると径0.3m程度、深さは0.18mとなる。埋土は暗褐色土の単層で、炭片を含むものがほとんどである。遺物は埋土中から土師器、須恵器の細片が出土しているが、各ピットの帰属時期を示すものではない。4はピット25から出土した土師器壺である。

ピット群1の南側ではほぼ東西に直線的に並ぶピット1~3を検出し、いずれにも柱材が遺存して



第33図 ピット群1分布図

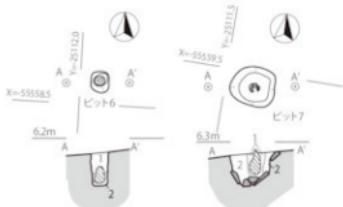


1 10YRC3/1黒褐色土  
小穂を含む  
2 10YRC2/1黒褐色土  
小穂を含む

1 10YRC3/1黒褐色土  
小穂を含む  
2 10YRC2/2黒褐色土  
小穂をわずかに含む  
灰面に炭層  
3 10YRA2/2灰黄褐色土  
小穂と炭片を含む  
4 10YRC2/1黒褐色土

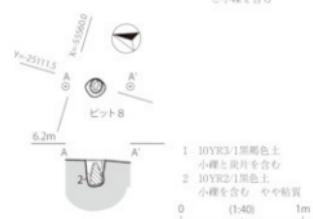
1 10YCL/1黒褐色土  
小穂を含む

1 10YRC3/1黒褐色土  
小穂と炭片を含む  
2 10YRC2/1黒褐色土  
やや粘質



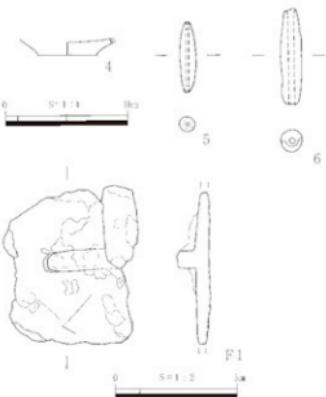
1 10YRC3/1黒褐色土  
小穂と炭片を含む  
2 10YRC2/1黒褐色土  
小穂を含む やや粘質

1 10YRA/1黒褐色土 炭片を含む  
やや粘質でしまりがない  
2 10YCL/1黒褐色土  
10YRA/2灰黄褐色土ブロック  
と小穂を含む



1 10YRC3/1黒褐色土  
小穂と炭片を含む  
2 10YRC2/1黒褐色土  
小穂を含む やや粘質

第34図 ピット群1・2



第35図 ピット群1・3出土遺物

いる。すべて角材で、図化したP1出土W2、P2出土W3は下端に加工痕が明瞭に残る。樹種はW2がクリ、W3がスギである。また、放射性炭素年代測定を行ったところ、 $2\sigma$ 暦年代範囲でW2が1179calAD-1258calAD(93.7%)、W3が1190calAD-1263calAD(95.4%)という結果が得られている。よって、周間に12~13世紀頃の建物や構築物が存在した可能性が高い。

#### ピット群2(第34・36図 PL10-3~6, 20)

調査区中央西側D 9・10、E 9・10、F 9・10グリッドに位置する。総数70基程度のピットからなる。埋没谷5検出面及び埋土中で検出したものが17基あるが、大半は谷の底面で検出している。

掘方は大半が円形もしくは楕円形を呈する。規模は最大で長軸が0.44mを測るが、平均すると径0.2m程度、深さは0.12mとなる。埋土は埋没谷5の検出面及び埋土中で検出したピットが褐灰色から灰黄褐色系であるのに対し、埋没谷5の底面で検出したものは黒褐色から暗褐色系となり、単層で炭片を含むものがほとんどである。遺物は8基から土器細片が出土しているが、ピットの帰属時期を示すものではない。

P 4~8には柱材、もしくは杭材が遺存していた。P 7は埋没谷5の埋土中、その他は底面で検出している。図化したP 4 W10は9cmほどの細い丸太材で、樹種はスギである。W10は放射性炭素年代測定したこと

ろ、 $2\sigma$ 暦年代範囲で1280calAD-1310calAD(53.3%)、1360calAD-1388calAD(42.1%)という結果が得られており、13世紀後半から14世紀後半の建物や構築物が存在した可能性が高い。

### ピット群3 (第35・37・38図 PL10-7・8、11-1・2、20)

調査区中央付近の南側G 6~8、H 7・8グリッドに位置する。総数110基程度のピットからなる。埋没谷5の北側及び東側と、埋没谷5の検出面及び埋土中で検出したものが、それぞれ39基で、その他は底面で検出している。

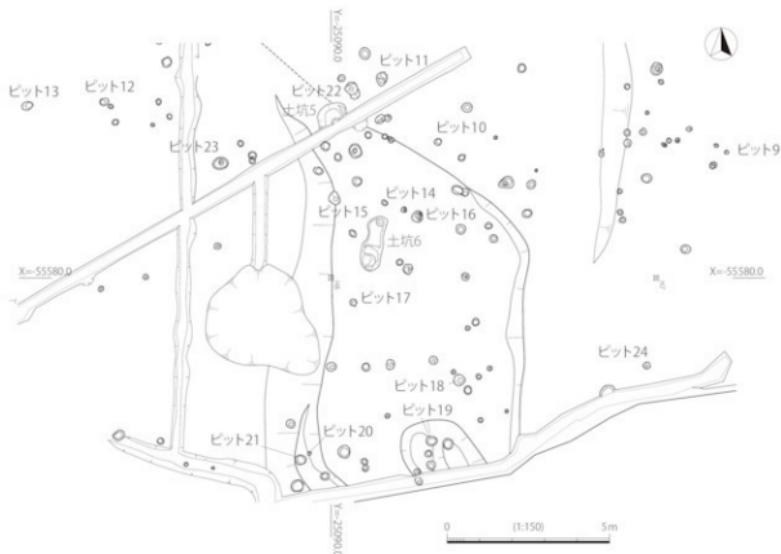
掘方は大半が円形もしくは梢円形を呈する。規模は最大で長軸が0.38mを測り、平均すると径0.25m程度、深さは0.16mとなる。埋土はピット群2と同様に、埋没谷5の検出面及び埋土中で検出したピットが褐色から灰黄褐色系であるのに対し、埋没谷5の底面、もしくは外側で検出したものは黒褐色系となり、単層で炭片を含むものが多くみられる。遺物は半数近いピットから弥生土器や土師器、須恵器の細片が出土しているが、ピットの帰属時期を示すものではない。5、6は土錘で、5がピット22、6がピット23から出土している。F 1はピット10から出土した不明鉄製品で、鋳造品である。

P 9~21には柱材、もしくは杭材が遺存している。団化したもののうち、ピット12W 4、ピット41W 9はミカン割りの分割材、ピット13W 5、ピット21W 8は角材、ピット24W 6、ピット15W 7は丸太材である。樹種はW 4、5、8がスキ、W 7、9がクリである。これら柱材や杭材は放射性炭素年代測定したところ、 $2\sigma$ 暦年代範囲でW 4が1184calAD-1263calAD(95.4%)、W 5が1,221calAD-1,273calAD(95.4%)、W 7が1,539calAD-1,635calAD(63.0%)、W 8が1,391calAD-1,420calBC(55.5%)、W 9が1,491calBC-1,603calBC(76.8%)という結果が得られている。

よって、ピット群3周辺には中世を通じて、建物や構築物が存在していた可能性が高い。



第36図 ピット群2分布図



第37図 ピット群3分布図

## 7 埋没地形と包含層出土遺物

### 埋没谷1 (第40図 PL5-2・3、6-1、11-6・7)

埋没谷1は斜面部に位置する。幅は狭いが、深い谷地形を形成しており、丘陵裾かけて谷筋が扇状に広がっている。埋没谷2～4も調査区外で分断されているが、基本的に埋没谷1から派生した谷筋とみてよい。谷の幅は5m～15m以上、深さは最大2mを測る。谷の埋土は褐色系の流水堆積(Ⅱ～Ⅳ層)であり、下層を中心に巨礫が数多く含まれていることなどから土石流によって埋没したと考えられる。

遺物は縄文晩期から近世に至る幅広い時期の土器や陶磁器等が出土している。出土遺物から埋没谷1は古墳時代前期以降に形成され、最終的に中世から近世にかけて完全に埋没してしまったと考えられる。

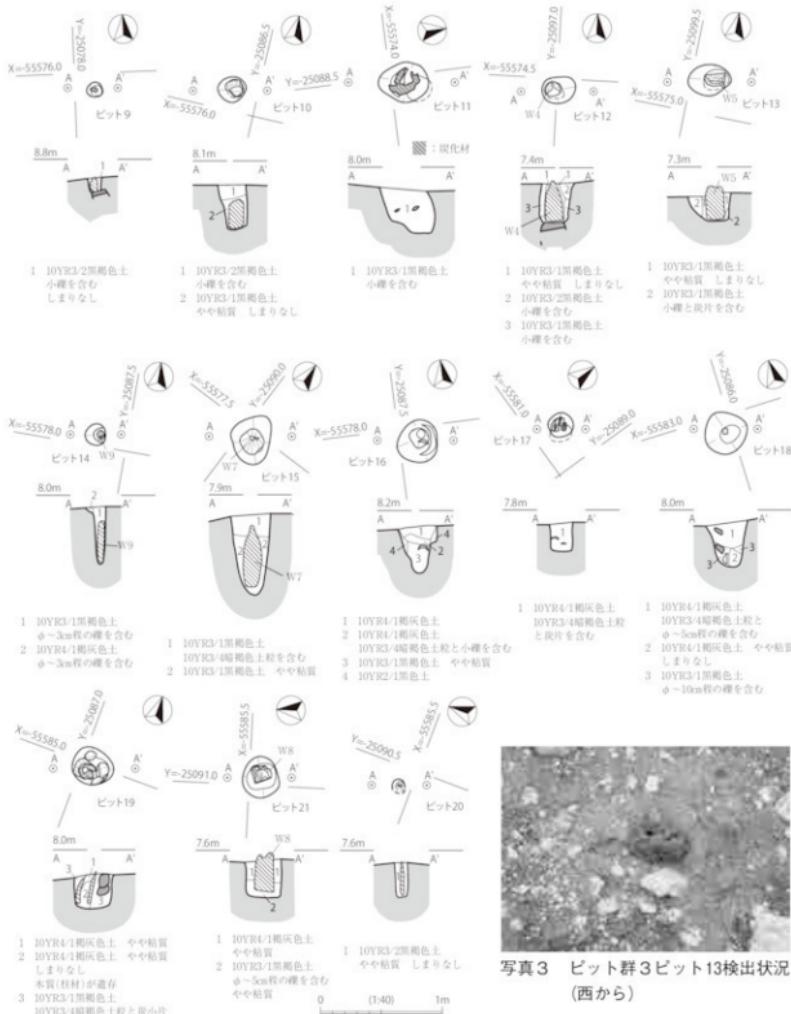
### Ⅱ層出土遺物(第41図 PL12-1)

Ⅱ層は中世から近世にかけての遺物を包含している。出土量はⅢ～Ⅳ層と比較して少ない。近世の陶磁器も僅かに出土しているが、細片のため図化し得なかった。7～9は中世の土師器で、7は壺、8は皿、9は柱状高台である。

### Ⅲ層出土遺物(第42・43図 PL12～17)

Ⅲ層は弥生時代後期から中世にかけての遺物を包含している。10は土師器皿であるが、中世に帰属する資料はこの他に僅かしかない。

11～14は古墳時代後期から古代にかけての資料である。11は須恵器長頸瓶で、二段構成である。肩



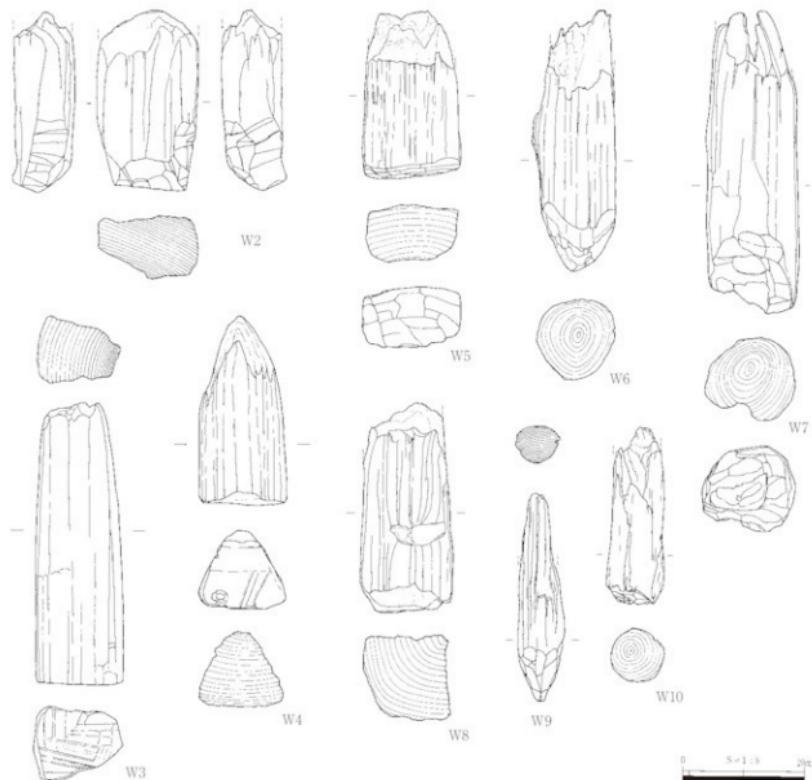
第38図 ピット群3

部はやや張るが、丸みを持っており、底部の切り離しは回転糸切りである。頭部中位に沈線が二条巡る。12、13は須恵器壺の口縁部破片、14は土師器壺である。

15~33は古墳時代前期から中期にかけての資料で、すべて土師器である。15は複合口縁の壺であるが、口縁部の退化が著しい。16、17は壺で、外反する口縁部を持つ。18はやや大型の直口壺である。20~27は壺で、複合口縁をもつもの(20~25)と布留系のもの(26、27)がある。前者のうち、23は小型



写真3 ピット群3ピット13検出状況  
(西から)



第39図 ピット群出土柱・杭材

の甕で、25は肩部に刺突文が施されている。29は瓶、28、32は高壺、30は小型丸底甕、31は低脚壺である。33は土製支脚で、中実で二つの突起をもつものである。

34～36は弥生時代後期に帰属する資料で、34、35は甕、36は台付甕である。

S 1は濃緑色を呈する碧玉の石核で、長さ2.9cm、幅2.8cm、厚さ2.9cmの立方体状を呈する。1面に縦面をもつ厚みのある剥片を素材に、主に単方向の両極打撃で管玉の素材を剥いたものと考えられる。大部分を色、質ともに不均等な刃材の部分が占めることから、割り切られた状態と考えられる。

#### M層出土遺物(第44・45図 PL12～17)

IV層は縄文時代晩期から古代にかけての遺物を包含している。縄文土器については細片のため、図化し得なかった。

37～40は古墳時代から古代にかけての資料である。37は高い高台を持つ須恵器壺で、底部の切り離しは回転糸切りである。39は須恵器瓶の口縁部破片で、頸部には2条の沈線が巡る。頸部内面に胴部との接合痕が段差となって明瞭に残る。

41～48は古墳時代前期の土師器である。41、42は甕で、外方する複合口縁を持つ。43、44は甕、45

は鼓形器台で、受口部内面にミガキ調整がみられる。47は小型の高坏であるが、坏部が塊状を呈し、脚部が八の字に開く特異な形態をなしている。

49~53は弥生時代後期の資料である。49は蓋の完形品で、高さがある。50は壺で、肩部に刺突文が施される。51~53は壺で、52は口縁部内面にミガキ調整がみられる。

54は脚を持つ手捏ね土器で、外面にはユビオサエが明瞭に残り、成・整形は粗雑である。55は中空の土製支脚である。S2は敲石と考えられ、下端部と上面中央に敲打痕がみられる。S3はサスカイト製の石匙である。ほぼ正三角形の素材剥片を、周辺のみ両面からの打撃で整形して仕上げているため、素材面が多く残っている。

#### II~IV層出土遺物(第40図 PL12~17)

埋没谷1のトレンチ掘削時に出土し、II~IV層のいずれに帰属するか特定できないものをここで報告する。

56~59は中世に帰属する資料である。56、57は土師器皿で、56は内面から口縁部外面にかけて煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。58は備前焼の擂鉢で、重根編年IVB期の資料とみられる。59は瓦質土器羽釜で、口縁部が内傾する。

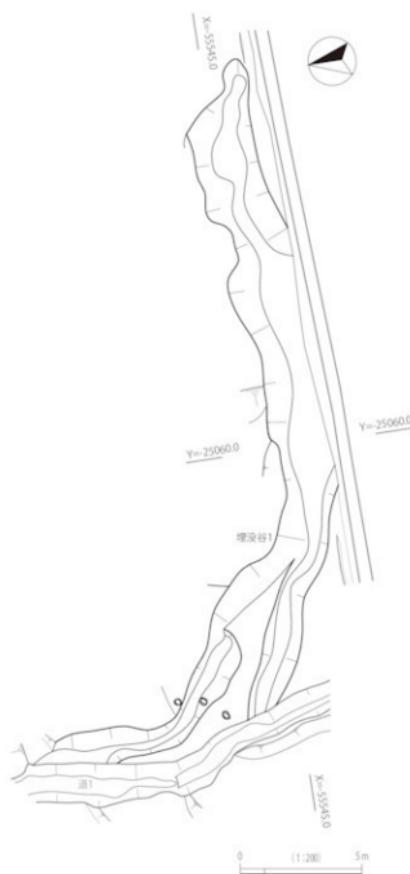
60~62は古墳時代後期から古代にかけての須恵器である。61は小型の壺とみられ、底部の切り離しが回転糸切りで、焼成も軟質で10世紀代の資料と考えられる。

63~66は古墳時代前期の土師器である。63は小型丸底壺で、66是有段の坏部を持つ。

67、68は土錘、S3は斑櫛岩製の茶臼である。

#### 埋没谷2・3・4(第41図)

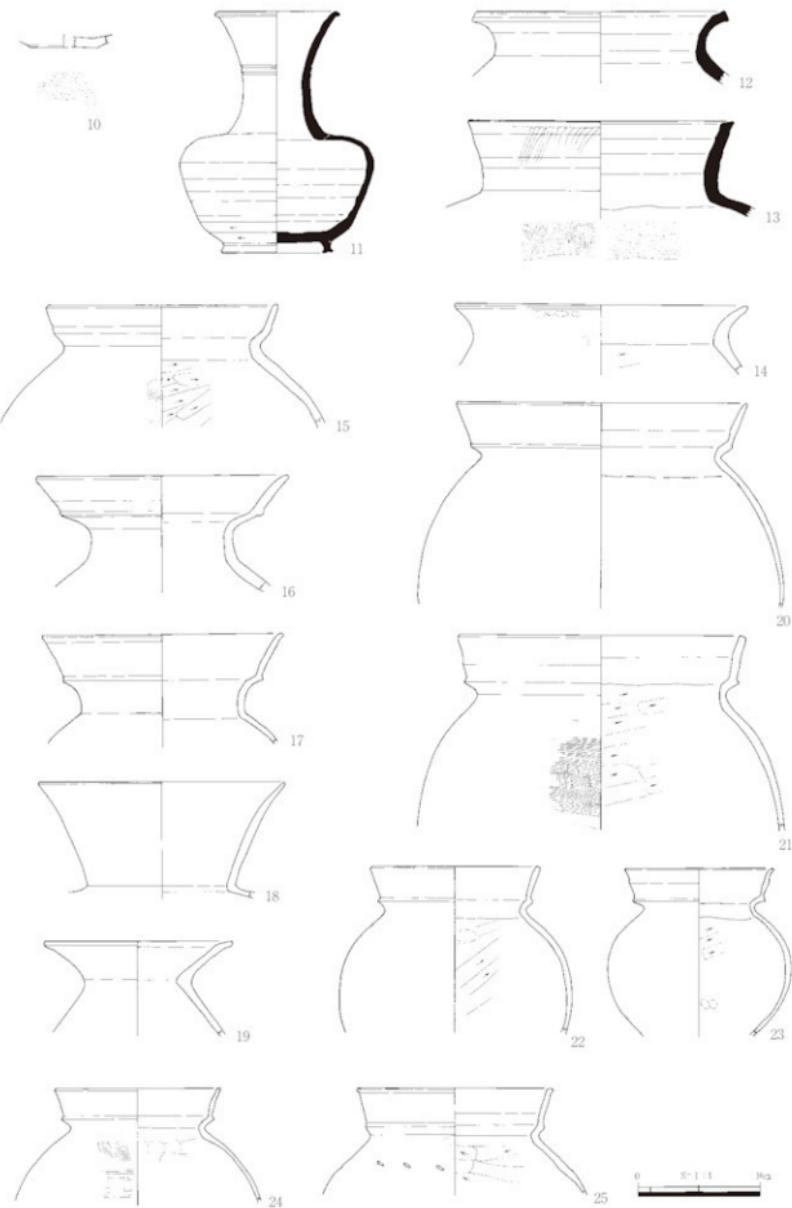
調査区中央部の東端、E 6・7グリッドの東から西に傾斜する標高8.8~10.8m付近に位置する。後世の開墾により、埋没谷2・4の下方側は削平されている。



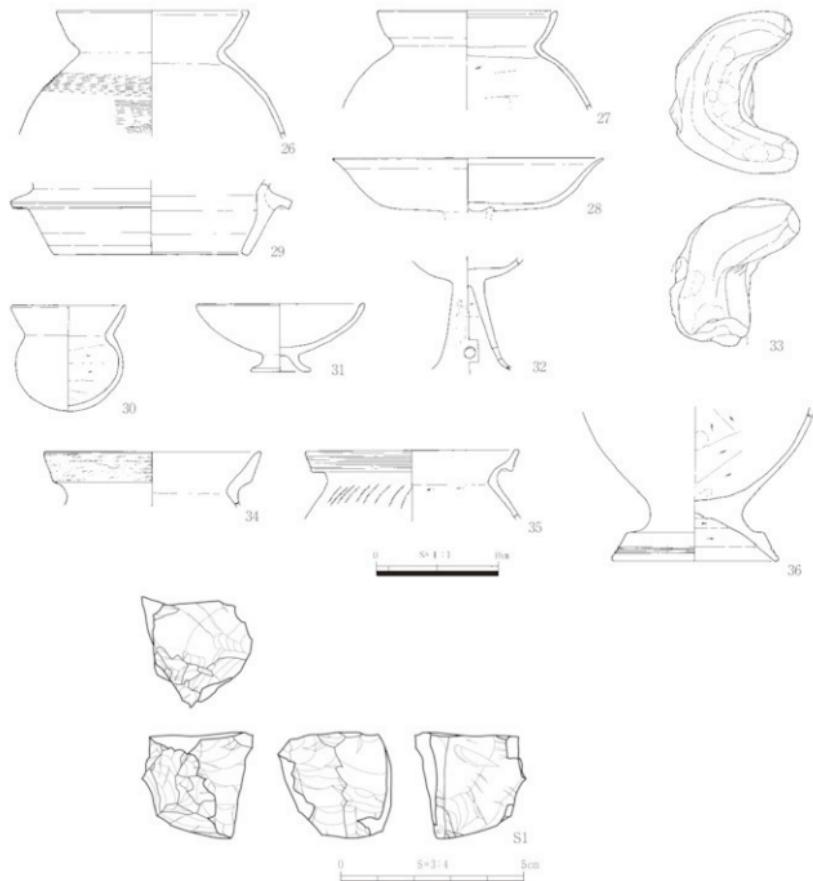
第40図 埋没谷1



第41図 埋没谷1 II層出土遺物



第42図 埋没谷1Ⅲ層出土遺物(1)



第43図 埋没谷1Ⅲ層出土遺物(2)

規模は、埋没谷2で幅1m前後、最大幅1.22m、深さ最大0.27m、埋没谷3で幅1.0~2.5m前後、最大幅2.47m、深さ最大0.78m、埋没谷4で幅1m前後、最大幅1.06m、深さ最大0.12mを測る。埋土はいずれも暗褐色土の単層で、比較的大型の礫を含んでいる。

遺物は出土していない。埋没谷1と同様に古墳時代前期以降に土石流によって埋没したものと考えられる。

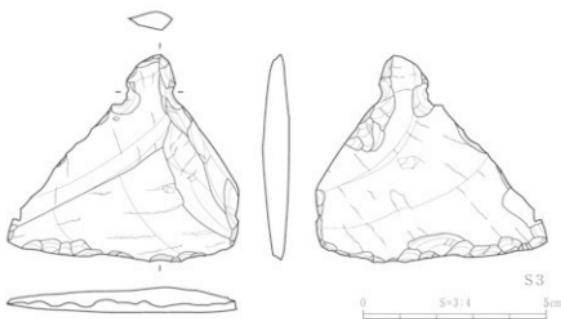
#### 埋没谷5(第48・49図 PL 6-2、11-3~5)

調査区西から南側一帯、D 9~10、E 9~10、F 8~10、G 7~10、H 7~9グリッドの標高5.7~8.1mを測る緩斜面に位置し、南東から北西に延びる。北端と西側は後世の開墾等により削平されている。

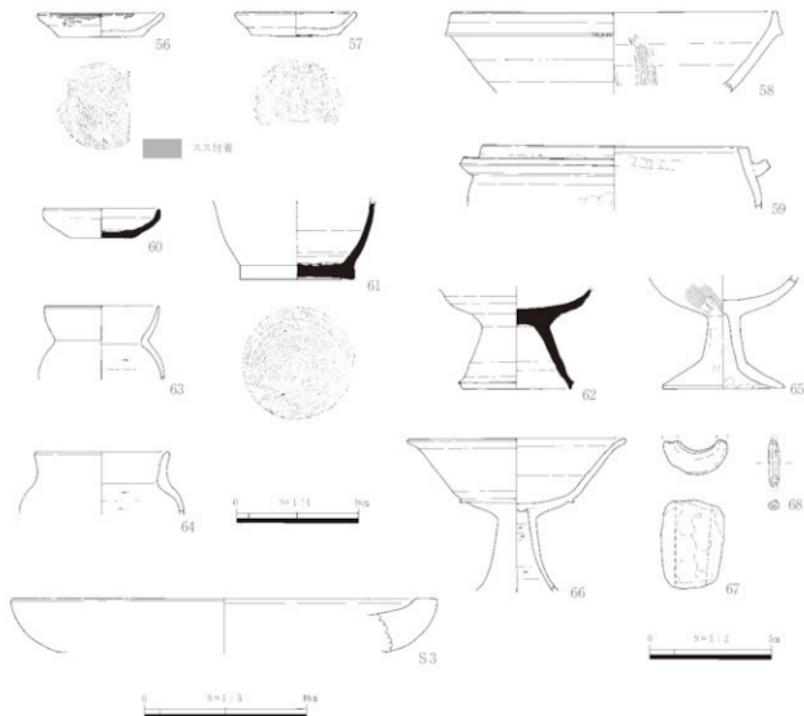
規模は幅8.7~17.2m、深さ最大0.7mで、長さは直線距離で48.4mを測る。埋土は黒褐色から暗褐色系で、いずれの層にも炭片と礫を含んでいる。



第44図 埋没谷1 IV層出土遺物(1)

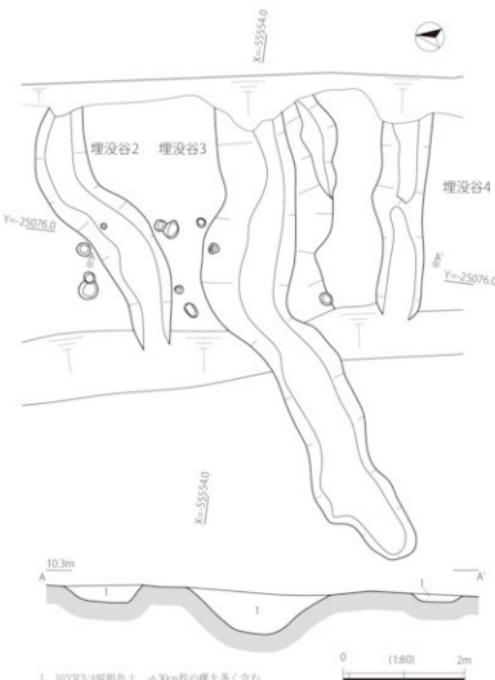


第45図 埋没谷1IV層出土遺物(2)



第46図 埋没谷1II～V層出土遺物

遺物は縄文時代から近世に至る幅広い時期の資料がみられ、その多くは、谷全体に堆積している極暗褐色土から出土しており、とくにF9、G8、H7グリッドにおいて密度が高い。また、H8グリッド南西隅では、最上層に堆積する黒褐色土から遺物が集中して出土している。なお、最下層の黒褐



第47図 埋没谷2～4

色土から出土した資料は僅かしかない。

埋土には礫を多く含むが、流水の痕跡は確認できない。谷の形成時期は不明だが、近世には完全に埋没してしまったと考えられる。

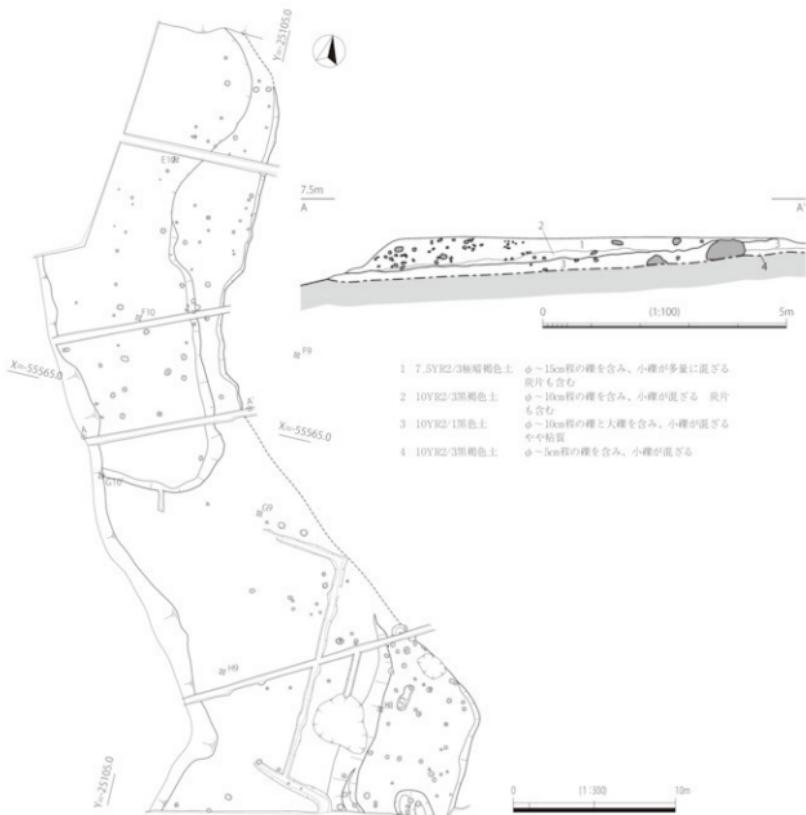
#### 埋没谷5出土遺物(第50・51図 PL17・18)

69は近世に帰属する資料で、陶器碗である。

70～78は古代末～中世に帰属する資料である。70は白磁碗で、口縁部が玉縁を呈する白磁IV類である。71は青磁碗で、無文の龍泉窯系E類とみられる。74～76は土師器壊皿である。72、77、78は鍋で、72は瓦質のものである。77、78は土師質のもので、78は口縁部がくの字を呈し、内外面に粗いハケ調整が施される。

79～84は古墳時代後期から古代に帰属する資料である。80、81は輪状つまみをもつ須恵器壊蓋で、かえりがある。82は須恵器瓶とみられる頸部から口縁部破片で、外面にカキ目がみられる。83は須恵器高環の脚部で、外面にやや特異な波状文が施されている。84は土師器塊で、口縁部がやや屈曲し外方へ広がる。

85～97は古墳時代前期の土師器である。85、86は壺で、外反する複合口縁をもつ。87は小型の甕である。88～89は小型丸底壺で、88は外面全面と口縁部内面に赤色塗彩が施されている。90は鼓形器台の受部である。91～93、97は高環で、93は壊部の内外面に丁寧なミガキが施されている。94、95は低



第48図 埋没谷5

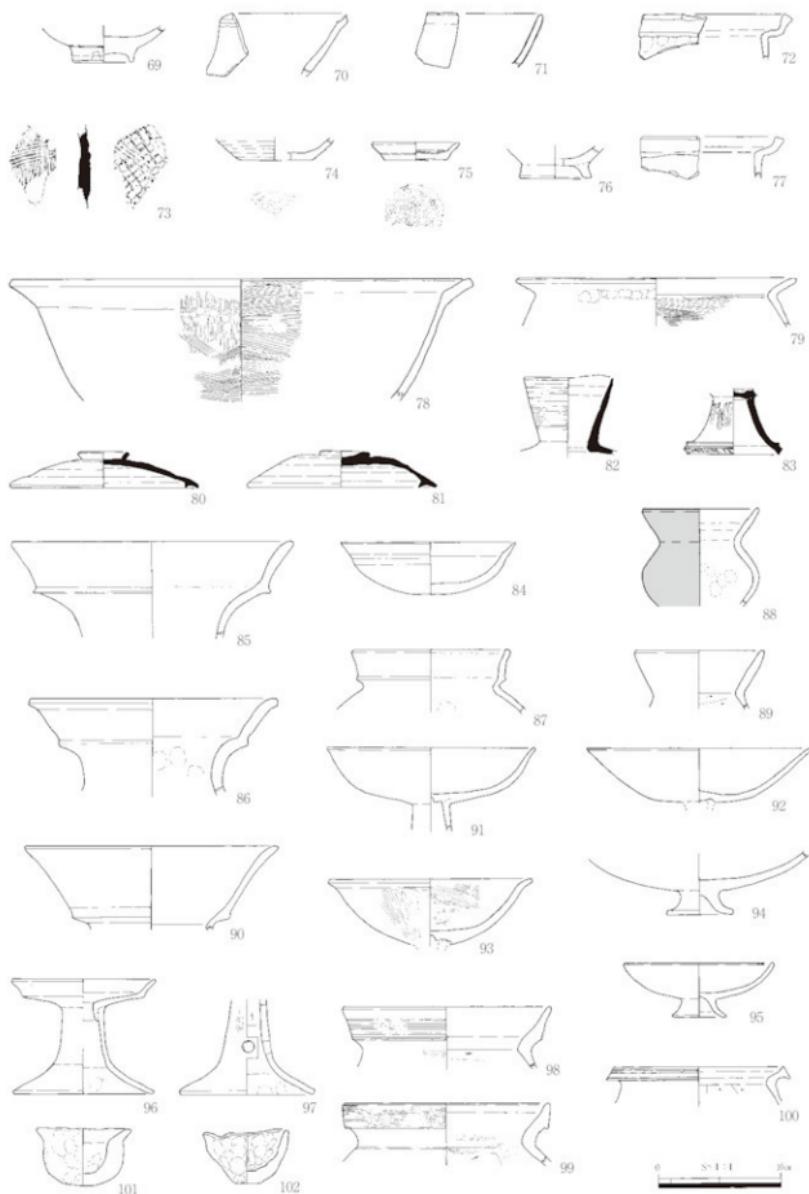
脚窓で、94は壊部が大きく、皿状を呈する。96は小型器台で、高窓型を呈し、受部と脚部の接合痕が段差となって明瞭に残る。

99、100は弥生土器で、いずれも後期に帰属する甕である。101、102は手捏ね土器で、内外面のユビオサエが顯著である。時期は特定できない。103は土玉、104は土錘である。

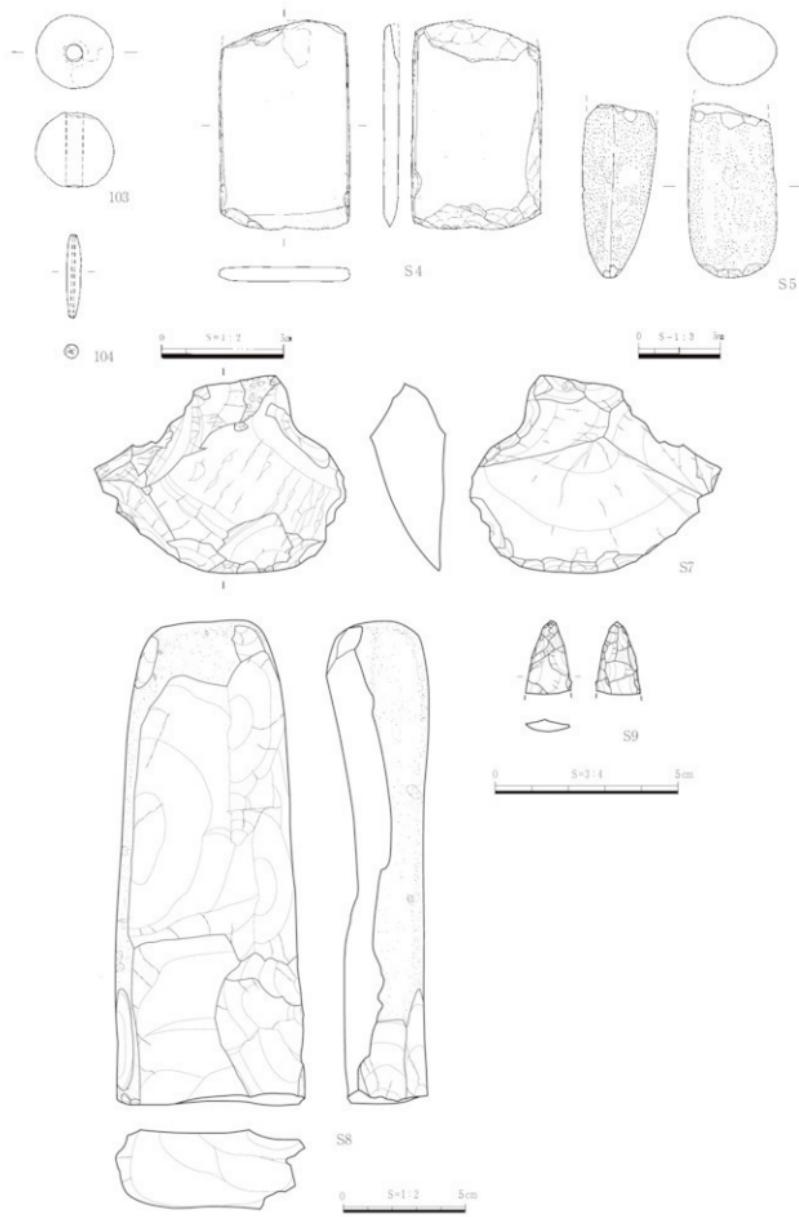
石器は5点を図化した。S 5は大型の扁平片刃石斧で、刃部に使用時の剝離がみられる。S 6は大型蛤刃石斧で、全面で細かな敲打痕がみられ、研磨痕はほとんど確認できない。S 7はサスカイト製の削器である。横形剥片を素材とし、末端辺のほぼ全辺に両面からの打撃で刃部を形成する。二次加工の深度は浅い。S 8は環石器で、扁平で細長い安山岩の円環を素材に、側面を打面として厚みを減じる作業を行っている。途中で一端が折れるものの作業は継続されるが、中央部にできた段差を除去する打撃がうまくいかず、放棄されている。形態からみて石錘を製作しようとしたものであろう。なお、裏面の礫面上に剥離面に先立つ線状痕と光沢面が認められるので、磨石を石錘素材に転用したも



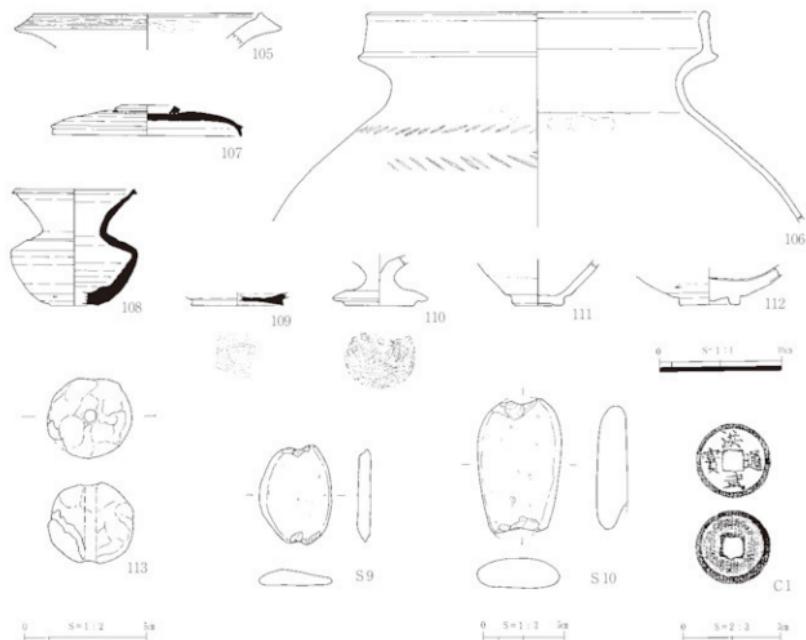
第49図 埋没谷5 遺物出土状況図



第50図 埋没谷5出土遺物(1)



第51図 埋没谷5出土遺物(2)



第52図 表土・搅乱土等出土遺物

のである。S 9はサヌカイト製の石鎚破片で、下半部を比較的新しい折れにより失っている。

## 8 その他の出土遺物

### 表土等出土遺物(第52図 PL19-1)

表土や耕作土、搅乱土からも遺物が出土しているが、出土量は僅かである。

105は弥生土器壺で、中期後葉の資料である。106は土師器壺で、口縁部が内傾し、肩部に羽状文の刺突がみられる。107は輪状つまみをもつ須恵器壺蓋で、108は須恵器壺である。110は須恵器壺の底部で、回転糸切りによる切り離しで、10世紀代に帰属する資料であろう。110は土師器柱状高台、111は瀬戸・美濃焼の天目茶碗、112は青磁の碗、もしくは鉢とみられる。

S 9、10は打欠石錘で、いずれも扁平な礫を使用している。

C 1は洪武通宝である。



写真4 斜面部調査風景

### 第3章 発掘調査の成果

表2 土器・土製品観察表(1)

造物 番号	出土 場所 番号	遺物 名	神 國 P. L.	種 類 型	法量 (cm)	手法上の特徴	出土 状況	色調	参考	
									参考元値	△現存値
1 149	集石土坑1	第16回 PL18-1	青磁 碗	器高: 1.9 △ 底径: 4.0 △	外面: 施釉 片切形の蓮瓣 内面: 施釉	良好	施釉: オーリーブ灰 施釉底系統日Ⅱ類			
2 532	道1	第16回 PL12-2	土師器 碗	器高: 1.0 △ 底径: 4.8 △	外面: 回転ナデ 底部回転舟切り 内面: 回転ナデ	良好	内外面: にごい褐色			
3 528	道1	第16回 PL12-3	磁器 碗	器高: 1.4 底径: 1.6	外面: 施釉 内面: 施釉	良好	施釉: 灰白色			
4 1112	ピット群1 ピット4	第32回 PL12-2	土師器 杯	器高: 1.4 △ 底径: 4.8 △	外面: 回転ナデ 底部回転舟切り 内面: 回転ナデ	良好	内外面: 浅黄褐色			
5 1167	ピット群3 ピット22	第32回 PL12-1	土師 杯	長さ: 2.9 口径: 0.7 孔径: 0.1	外面: ナデ	良好	赤褐色	重さ: 1.30g		
6 1109	ピット群3 ピット23	第32回 PL12-2	土師 杯	長さ: 3.9 口径: 0.9 孔径: 0.2	外面: ナデ	良好	浅黄色	重さ: 2.66g		
7 139	D6 II層	第41回 PL12-1	土師器 杯	口径: 8.7 △ 器高: 2.5 底径: 2.9 △	外面: 回転ナデ 底部回転舟切り 内面: 回転ナデ	良好	外面: 浅黄褐色 内面: 黄褐色			
8 113	D6 II層	第41回 PL12-2	土師器 皿	器高: 1.2 △ 底径: 4.4 △	外面: 回転ナデ 底部回転舟切り 内面: 回転ナデ	良好	内外面: 浅黄褐色			
9 457	D6 II層	第41回 PL12-3	柱状高台 II層	器高: 2.3 △ 底径: 6.0 △	外面: 回転ナデ 底部回転舟切り	良好	外面: 黄褐色			
10 535	D4 II層 C-C'	第42回 PL16-1	土師器 杯/皿	器高: 1.1 △ 底径: 5.4 △	外面: 回転ナデ 底部回転舟切り 内面: 回転ナデ	良好	外面: にごい黄褐色 内面: 淡褐色			
11 517	D3 II層 A-A'	第42回 PL12-2	須恵器 鉢	口径: 9.6 器高: 15.8 底径: 9.0	外面: 回転ナデ 脚部下平底軒ハラズクリ 内面: 口縁部系切り後丁寧なナデ消し 内面: 回転ナデ	良好	外面: 灰~灰白色			
12 217	D3 II層	第42回 PL15-1	須恵器 甌	口径: 20.9 △ 器高: 6.0 △	外面: 口縁部回転ナデ 内面: 口縁部回転ナデ 脚部以下円筒内凹具微	良好	内外面: 灰色			
13 230	D4 II層	第42回 PL12-3	須恵器 甌	口径: 21.5 △ 器高: 7.8 △	外面: 口縁部回転ナデ 内面: 口縁部回転ナデ 脚部以下圓筒内凹具微	良好	内外面: 灰色			
14 545	D3 II層 A-A'	第42回 PL12-4	土師器 甌	口径: 23.8 △ 器高: 5.6 △	外面: 口縁部ユビオサエ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ	良好	内外面: 明褐色			
15 271	D3 II層	第42回 PL16-1	土師器 甌	口径: 18.6 △ 器高: 10.0 △	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ	良好	外面: にごい黄褐色			
16 229	D5 II層	第42回 PL12-5	土師器 甌	口径: 20.4 △ 器高: 9.5 △	外面: ハニカミにより調整不明	良好	内外面: 黄褐色			
17 86	D4 II層	第42回 PL12-6	土師器 甌	口径: 19.2 △ 器高: 9.0 △	外面: ハニカミにより調整不明	良好	内外面: 灰色			
18 254	D4 II層	第42回 PL12-3	土師器 直口甌	口径: 20.1 △ 器高: 9.4 △	外面: ハニカミにより調整不明	良好	内外面: 灰色			
19 240	D4 II層	第42回 PL16-1	土師器 甌	口径: 15.2 △ 器高: 7.5 △	外面: ハニカミにより調整不明	良好	内外面: 黄褐色			
20 184	D2 II層	第42回 PL16-2	土師器 甌	口径: 23.6 △ 器高: 16.6 △	外面: ハニカミにより調整不明	良好	内外面: 浅褐色			
21 184	D2 II層	第42回 PL16-1	土師器 甌	口径: 20.6 △ 器高: 15.8 △	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ後ナデ	良好	外面: にごい黄褐色 内面: にごい褐色~にごい紫色			
22 283	D2 II層	第42回 PL16-1	土師器 甌	口径: 13.4 △ 器高: 13.6 △	外面: ハニカミにより調整不明 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ後一部ユビオサエ	やや 良好	内外面: 明褐色			
23 539	D3 II層 A-A'	第42回 PL14-1	土師器 甌	口径: 11.8 △ 器高: 13.7 △	外面: ハニカミにより調整不明 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ後ユビオサエ	良好	内外面: 灰~にごい褐色			
24 564	D2 II層 B-B'	第42回 PL14-1	土師器 甌	口径: 13.2 △ 器高: 10.2 △	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ・ユビオサエ	良好	内外面: にごい黄褐色			
25 563	D2 II層 B-B'	第42回 PL14-2	土師器 甌	口径: 15.9 △ 器高: 8.7 △	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ後ナデ	良好	内外面: 浅褐色			
26 184	D2 II層	第42回 PL16-1	土師器 甌	口径: 15.2 △ 器高: 10.2 △	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ	やや 良好	外面: にごい黄褐色 内面: 浅褐色			
27 222	D3 II層	第42回 PL15-1	土師器 甌	口径: 15.2 △ 器高: 10.2 △	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ 脚部以下ケズリ	良好	外面: 明黄褐色 内面: 褐色			
28 188	D3 II層	第42回 PL15-1	土師器 高杯	口径: 22.1 △ 器高: 4.4 △	外面: ハニカミにより調整不明 内面: ハニカミにより調整不明	良好	内外面: 浅黄褐色			
29 218	D3 II層	第42回 PL15-1	土師器 甌	口径: 16.1 △ 器高: 6.1 △	外面: ナデ 内面: ナデ	良好	内外面: 灰色			
30 254	D4 II層	第42回 PL15-1	小型丸底甌	口径: 9.2 器高: 8.7	外面: ナデ 内面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ	良好	外面: 褐色 内面: 明褐色			

表3 土器・土製品観察表(2)

※復元値 △現存値

遺物 番号	出土 場所	遺物 番号	種類 名	種類 形態	法量 (cm)	手法上の特徴	出土 状況	色調	備考
31	228	D4 II層	第430H PL12-3	土罐器 鉢脚環	口径：13.6 ㎜ 脚高：4.8 ㎜ 底径：4.8 ㎜	外面部：風化により調整不明 内面部：脚底ミガキ 3方向の透かし	著	良好 内外面：浅黄褐色	
32	433	D3 II層	第430H	土罐器 高杯	脚高：9.1 ㎜	外面部：脚底ミガキ 3方向の透かし 内面部：脚底上段ナメタリ、下部ナメ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
33	218	D3 II層	第430H PL17-1	土製文具	脚高：12.6 ㎜	外面部：ナメ。ユビオサエ	著	良好 外面部：褐色～黒灰色	
34	240	D4 II層	第430H PL16-1	弥生土器 壺	口径：17.6 ㎜ 脚高：4.5 ㎜	外面部：口部底平行直線 内面部：口部底ナメ 脚部以下ケズリ	やや 破	良好 内外面：褐色	
35	240	D4 II層	第430H PL16-1	弥生土器 壺	口径：17.2 ㎜ 脚高：5.6 ㎜	外面部：口部底4本円溝 脚部貝殻による刺突文 内面部：口部底ナメ 脚部以下ケズリ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
36	245	D4 II層	第430H PL13-1	弥生土器 臼付壺	脚高：12.5 ㎜ 底径：13.2 ㎜	外面部：漏斗不明 頭部凹窪 内面部：脚部ケズリ後ナメ。一部ユビオサエ、脚 部ケズリ後ナメ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
37	130	D3 IV層	第440H PL14-1	須恵器 壺	脚高：2.5 ㎜ 底径：8.6 ㎜	外面部：回転ナメ	著	良好 内外面：灰色	
38	331	D2 IV層	第440H PL14-1	須恵器 壺	脚高：2.1 ㎜	外面部：回転ナメ	著	良好 外面部：灰色 内面部：灰白色	
39	384	D3 IV層	第440H PL15-1	須恵器 板	口径：12.1 ㎜ 脚高：7.4 ㎜	外面部：回転ナメ 頭部沈没2条 脚部以下平行 タキ	著	良好 外面部：褐色 内面部：灰色	
40	384	D3 IV層	第440H PL14-1	土罐器 壺	口径：22.2 ㎜ 脚高：8.4 ㎜	外面部：口部底ナメ	著	良好 外面部：褐色～黒褐色	
41	80	D4 IV層	第440H PL14-1	土罐器 壺	口径：19.8 ㎜ 脚高：6.0 ㎜	外面部：回転ナメ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
42	331	D2 IV層	第440H PL13-1	土罐器 壺	口径：15.7 ㎜ 脚高：6.8 ㎜	外面部：口部底ナメ 脚部以下ハケカ タキ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
43	123	D3 IV層	第440H PL12-3	土罐器 壺	口径：13.2 ㎜	外面部：口部底ナメ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
44	350	D2 IV層	第440H PL13-1	土罐器 壺	口径：13.4 ㎜	外面部：ナメ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
45	370	D6 II層	第440H PL	土罐器 盤付	口径：21.3 ㎜ 脚高：7.3 ㎜	外面部：受口底ナメ タキ 脚部底ケズリ	著	良好 内外面：褐色	
46	86	D3 IV層	第440H PL15-1	土罐器 高杯	口径：15.3 ㎜ 脚高：9.4 ㎜	外面部：風化により調整不明 一部ミガキ 内面部：風化により調整不明	著	良好 内外面：褐色	内外赤色透彩
47	314	D3 IV層	第440H PL13-1	土罐器 小型高杯	口径：10.7 ㎜	外面部：風化により調整不明	著	良好 内外面：浅黄褐色	
48	337	D2 IV層	第440H PL15-1	土罐器 鉢脚環	口径：12.9 ㎜ 脚高：5.3 ㎜	外面部：ナメ 脚部ミガキ 内面部：ミガキ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
49	327	D3 IV層	第440H PL13-1	弥生土器 壺	口径：10.6 ㎜	外面部：ナメ	やや 破	良好 内外面：黑褐色～棕色	
50	329	D4 IV層	第440H PL13-1	土罐器 壺	口径：13.4 ㎜ 脚高：9.4 ㎜	外面部：口部底平行直線 脚部以下ケズリ	著	良好 内外面：明黄褐色	
51	328	D2 IV層	第440H PL14-1	弥生土器 壺	口径：17.0 ㎜	外面部：口部底平行直線 ナメハケ 内面部：口部底ナメ 脚部以下ケズリ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
52	312	D3 IV層	第440H PL14-1	弥生土器 壺	口径：18.3 ㎜	外面部：口部底平行直線 内面部：口部底ミガキ 頭部以下ケズリ	著	良好 内面部：褐色	
53	330	D4 IV層	第440H PL13-1	弥生土器 壺	口径：16.4 ㎜	外面部：口部底ナメ 脚部ナメ	著	良好 内外面：灰黄色	
54	369	D2 IV層	第440H PL13-1	土罐器 小型品	口径：5.0 ㎜	外面部：ナメ底ユビオサエ	著	良好 内外面：浅黄褐色	
55	148	D3 IV層	第440H PL17-1	土製文具	脚高：5.6 ㎜	外面部：ナメ ユビオサエ	著	良好 外面部：灰褐色	中空
56	823	D7 II～IV層	第460H PL14-1	土罐器 壺	口径：10.0 ㎜ 脚高：6.8 ㎜	外面部：回転ナメ 脚部回転系切り 板目压痕 内面部：回転ナメ	著	良好 外面部：灰褐色 内面部：明黄褐色	打明显
57	823	D7 II～IV層	第460H PL14-1	土罐器 壺	口径：8.7 ㎜ 脚高：2.0 ㎜	外面部：回転ナメ 脚部回転系切り 内面部：回転ナメ	著	良好 内外面：褐色	
58	800	D6 II～IV層	第460H PL14-1	漆前焼 接跡	口径：26.6 ㎜ 脚高：6.6 ㎜	外面部：回転ナメ 内面部：回転ナメ 脚部	著	良好 外面部：褐色 内面部：灰褐色	
59	33	D4 II～IV層	第460H PL14-1	瓦質土器 引葉	口径：21.6 ㎜ 脚高：5.1 ㎜	外面部：回転ナメ ユビオサエ 内面部：回転ナメ	著	良好 外面部：灰色 内面部：灰白色	
60	19	D2 II～IV層	第460H PL14-1	須恵器 壺	口径：9.4 ㎜ 脚高：2.4 ㎜	外面部：回転ナメ 底部ヘタ切り後回転ナメ 内面部：回転ナメ	著	良好 内外面：灰色	
61	34	D5 II～IV層	第460H PL15-1	須恵器 壺	脚高：6.6 ㎜ 底径：9.1 ㎜	外面部：回転ナメ 脚部回転系切り 内面部：回転ナメ	著	良好 外面部：灰白色 内面部：灰白色	

### 第3章 発掘調査の成果

表4 土器・土製品観察表(3)

番号	出土 場所 番号	遺構 番号	神國 氏	種類 型式	法量 (cm)	手法上の特徴	出土 状況	焼成	色調	参考	
										単復元値	△現存値
62	20	D3 II~Ⅳ層	第46回	直腹器 高杯	器高：8.4△ 底径：8.8△	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	良好	内外面：灰白色			
63	34	D5 II~Ⅳ層	第46回 PL18-1	土器器 小口丸底盆	口径：9.2◆ 器高：6.0△	外面：調整不明 内面：口接部ナデ 頭部以下ケズリ	良好	内外面：浅黃褐色			
64	222 414	D3 II層	第46回	土器器 小型壺	口径：10.8◆ 器高：5.1△	外面：ナデ 内面：口接部ナデ 頭部以下ケズリ	良好	内外面：にぶい黄褐色			
65	30	D4 II~Ⅳ層	第46回	土器器 高杯	器高：9.2△ 底径：10.0◆	外面：杯部ハケ 脚部ミガキ 内面：杯部調整不明 脚部ナデユビオサエ	良好	外側：明黃褐色 内側：明黃褐色~黃褐色			
66	27~ 28	D2 II~Ⅳ層	第46回 PL18-1	土器器 高杯	口径：16.6◆ 器高：12.5△	外面：ナデ 有段内底部を持つ。 内面：杯部ミガキ 脚部ケズリ	良好	内外面：浅黃褐色			
67	631	C5 Ⅳ層	第46回	土器	長さ：3.7 外径：2.6 孔径：1.4	外面：ナデ、ユビオサエ	良好	外側：褐色 内側：褐色~にぶい褐色	8.96 g △		
68	15	D3 II~Ⅳ層	第46回	土器	長さ：3.9 外径：0.9 孔径：0.25	外面：ナデ、ユビオサエ	良好	褐色			
69	921	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	陶器 碗	器高：3.0△ 底径：4.6◆	外面：施釉 出目高台	良好	施釉：オーリーブ灰色 露胎：にぶい赤褐色			
70	754	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	白磁	器高：5.1△	外面：施釉 口縁部玉緑	良好	外側：灰白色 内側：淡黄色			白磁病変類
71	635	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	青磁	器高：4.4△	外面：施釉 無文	良好	施釉：オーリーブ灰			藍磁底座病変類
72	782	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	瓦質土器 鍋	器高：3.7△	外面：ナデ 一部ユビオサエ 内面：ナデ	良好	内外面：黄灰色			
73	255	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	中腹直唇器	器高：6.8△	外面：筋ナタタキ 内面：瓶内側	良好	外側：浅黃褐色 内面：灰黃色			龜山系
74	663	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 杯	器高：1.8△ 底径：2.8◆	外面：回転ナデ 底部回転舟切り 内面：回転ナデ	良好	外側：にぶい褐色 内面：にぶい黃褐色			
75	243	埋没谷5 上面	第50回 PL18-1	土器器 皿	口径：6.9◆ 器高：1.49 底径：5.1◆	外面：回転ナデ 底部回転舟切り 内面：回転ナデ	良好	内外面：褐色			
76	388	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 环	器高：2.7△ 底径：5.7◆	内外面：回転ナデ	良好	外側：褐灰色 内面：にぶい褐色			
77	664	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 罐	器高：3.5△	内外面：回転ナデ	良好	外側：褐色 内面：にぶい黃褐色~褐色			
78	667	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 罐	口径：37.4◆ 器高：10.0△	外面：ハケ 頭部一部ユビオサエ 内面：ハケ	良好	外側：灰黃褐色 内面：にぶい褐色			
79	798	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 更	口径：22.5◆ 器高：4.0△	外面：ナデ 頭部一部ユビオサエ 内面：口接部ナデ 頭部以下ハケ	良好	外側：にぶい褐色~褐色			
80	399	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	直腹器 坏蓋	器高：15.4◆ 器高：3.0	外面：回転ナデ 天井部回転ヘラケズリ後回転 ナデ 内面：回転ナデ	良好	外側：灰褐色			
81	388	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	直腹器 坏蓋	口径：15.4 器高：3.0	外面：回転ナデ 天井部回転ヘラケズリ後回転 ナデ 内面：回転ナデ	良好	外側：灰褐色			
82	349	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	直腹器 瓶	口径：7.2◆ 器高：6.4△	外面：口接・頭部下カキ目 内面：回転ナデ	良好	外側：灰褐色 内面：灰褐色			焼き盡みあり
83	261	埋没谷5 1層	第50回 PL17-3	直腹器 高杯	器高：5.0△ 底径：7.4◆	外面：ナデ 頭部一部ユビオサエ 内面：回転ナデ	良好	外側：暗褐色灰 内面：明褐色灰			
84	278	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 壺	口径：14.2◆ 器高：4.8△	内外面：風化により調整不明	良好	外側：にぶい褐色			
85	672	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 壺	口径：22.8◆ 器高：7.9△	内外面：ナデ	良好	内外面：浅黃褐色			
86	700	埋没谷5 黑色系土	第50回 PL18-1	土器器 壺	口径：20.0◆ 器高：8.0△	外面：ナデ 内面：ナデ、一部ユビオサエ	やや 良好	外側：褐色 内面：褐色			
87	863	埋没谷5 黑色系土	第50回 PL18-1	土器器 更	口径：12.4◆ 器高：5.3△	外面：ナデ 内面：調整不明、一部ユビオサエ	良好	外側：浅黃褐色 内面：灰白色			
88	305	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 小型丸底盆	口径：9.2◆ 器高：8.0△	外面：ナデ、赤褐色 内面：口接部ナデ、頭部以下ナデ後一部ユビオ サエ クロタル赤褐色	良好	内外面：浅黃褐色			
89	722	埋没谷5 黑色系土	第50回 PL18-1	土器器 小型底盆	口径：10.4◆ 器高：4.7△	外面：調整不明 内面：ナデ、頭部以下ケズリ	やや 良好	外側：明褐色 内面：橙色			
90	674	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 習合	口径：20.5◆ 器高：6.8△	外面：風化により調整不明	良好	外側：浅黃褐色			
91	673	埋没谷5 1層	第50回 PL18-1	土器器 高杯	口径：16.8◆ 器高：6.7△	外面：風化により調整不明	良好	外側：浅黃褐色			
92	1200	埋没谷5 黑色系土	第50回 PL18-1	土器器 壺	口径：18.4◆ 器高：4.5△	外面：風化により調整不明	良好	外側：褐色			

表5 土器・土製品觀察表(4)

遺物 番号	出土 番号	遺物 種類	神國 名	種類 形態	法量 (cm)	手法上の特徴	出土 地點	焼成	色調	備考	単復元値 △現存値	
											表面	裏面
93	1201	埋没谷5 黑色系土	第5004	上縁部 高杯	口径：16.0 壁高：5.4△ 底径：4.0	外面部：1ガキ、工具痕あり 内面部：ハケ痕△ガキ	やや 焼	良好	内外面：褐色			
94	712	埋没谷5 黑色系土	第5004	上縁部 乳鉢形	口径：5.0△ 壁高：5.4	内外面：風化により調整不明	更	良好	外面部：灰白色 内面部：褐色			
95	715	埋没谷5 黑色系土	第5004	上縁部 乳鉢形	口径：12.1△ 壁高：4.4 底径：4.0△	外面部：風化により調整不明 内面部：外部調整不明、脚部ナデ	更	良好	外面部：浅黃褐色～褐色 内面部：にぶい黃褐色			
96	801	埋没谷5 1層	第5004 PL17-3	上縁部 小型容器	口径：11.6△ 壁高：9.4 底径：11.4△	外面部：風化により調整不明 内面部：風化により調整不明、脚部ハケ	更	良好	内外面：浅黃褐色			
97	718	埋没谷5 黑色系土	第5004	上縁部 高杯	口径：16.0 壁高：10.9△	外面部：脚部摩耗が大きい、1ガキ△、3方向 内面部：脚部上半ケズり後ナデ、下半スピオサエ	更	良好	内外面：浅黃褐色			
98	729	埋没谷5 1層	第5004 PL18-1	弥生土器 壺	口径：16.7△ 壁高：5.0△ 底径：3.0△	外面部：口縁部平行洗刷、底部以下一部ハケ 内面部：口縁部ナデ、一部ハケ、脚部以下ケズリ	更	良好	内外面：にぶい黃褐色			
99	887	埋没谷5 黑色系土	第5004 PL18-1	弥生土器 壺	口径：16.7△ 壁高：5.0△ 底径：4.1△	外面部：口縁部平行洗刷、底部以下ナデ 内面部：口縁部ナデ、一部ハケ、脚部以下ケズリ	更	良好	内外面：にぶい黃褐色			
100	738	埋没谷5 1層	第5004 PL18-1	弥生土器 壺	口径：14.0△ 壁高：7.6△ 底径：3.0△	外面部：口縁部3条の擦痕 内面部：脚部以下ケズリ	更	良好	内外面：にぶい黃褐色			
101	820	埋没谷5 1層	第5004 PL17-3	手捏土器 壺	口径：7.3△ 壁高：4.7△ 底径：4.1△	外面部：スピオサエ 内面部：ナデ△スピオサエ	更	良好	内外面：にぶい黃褐色			
102	311	埋没谷5 1層	第5004 PL17-3	手捏土器 壺	口径：6.8△ 壁高：4.4△ 底径：3.1	外面部：スピオサエ 内面部：ナデ△スピオサエ	更	良好	内外面：にぶい黃褐色			
103	928	埋没谷5 1層	第5114	土玉	孔径：0.7 長さ：3.4 外径：0.6 孔径：0.1	外面部：ナデ△スピオサエ	更	良好	外面部：黒～灰褐色 重量26.67g			
104	781	埋没谷5 1層	第5114	土錐	長さ：3.4 外径：0.6 孔径：0.1	外面部：ナデ	更	良好	内外面：褐色～にぶい褐色 重量1.28g			
105	250	F8 表土	第5224 PL19-1	弥生土器 壺	口径：18.7△ 壁高：2.8△ 底径：3.0△	外面部：口縁部5条凹痕 内面部：口縁部ハケ	更	良好	内外面：褐色			
106	39	5 表土	第5224 PL17-3	土縁部 杯	口径：27.2△ 壁高：17.0△ 底径：1.6△	外面部：口縁部ナデ、肩部剥離 内面部：剥離不明、肩部一部スピオサエ	更	良好	内外面：浅黃褐色			
107	91	F9 表土	第5224	須恵器 杯蓋	口径：15.4 壁高：1.6 底径：5.6△	外面部：天井部回転ハケケズり後ナデ 口縫ナデ 内面部：ハケ	更	良好	内外面：灰色			
108	91	F9 表土	第5224	須恵器 瓶	口径：9.8△ 壁高：9.0△ 底径：4.1△	外面部：回転ナデ、胸部下半回転ハケケズリ 内面部：回転ナデ	更	良好	内外面：青灰色			
109	1	表土	第5224 PL19-1	須恵器 壺	壁高：1.1△ 底径：7.6△ 内面部：回転ナデ	外面部：回転ナデ、底部回転系切り 内面部：回転ナデ	更	良好	内外面：青灰色			
110	189	G7	第5224	土縁部 柱状高台	壁高：4.1△ 底径：5.6△	外面部：回転ナデ、底部回転系切り	更	良好	外面部：オリーブ褐色 内面部：にぶい黃褐色～黃灰色			
111	655	H8 泥丸土	第5224 PL19-1	壺内、尖頭燒 天口系繩	口径：3.7△ 底径：3.8△ 内面部：ハケ	外面部：鉄輪 体部下半、高台は露胎 内面部：鉄輪	更	良好	輪：黒色 鉄上：にぶい黃褐色 天窓期			
112	432	F10 泥丸土	第5224 PL19-1	壺	口径：3.1△ 底径：5.0△ 内面部：ハケ	外面部：施輪 体部下半、高台は露胎 内面部：ハケ	更	良好	輪：明緑灰白色 鉄上：淡黃褐色 巻雲雷系			
113	417	F8 表土	第5224	土玉	口径：3.5 孔径：0.5	外面部：ナデ△スピオサエ	更	良好	外面部：黒褐色 重量30.7g			

### 第3章 発掘調査の成果

表6 石器・石製品観察表

遺物 番号	地区 遺構・層位名	取上 番号	種別 PL.	種類	石材	法 葉 (cm)	△現存値	
							重量 (g)	備考
S 1	Ⅲ層	261	第43回 PL19-3	石核	碧玉	最大長:2.9 最大幅:2.8 最大厚:2.9	30.3	
S 2	D 2 Ⅳ層	301	第44回 PL19-4	敲石	ダイサイト	最大長:17.0 最大幅:12.5 最大厚:5.4	1560	
S 3	D 2 Ⅳ層	324	第45回 PL19-3	石核	サヌカイト	最大長:5.6 最大幅:6.2 最大厚:0.7	20.2	
S 4	D 6 Ⅱ～Ⅲ層	783	第51回 PL17-2	茶臼	斑麻岩	径:34.8 △ 最大厚:3.1	401	
S 5	埋没谷 5 1層	600	第51回 PL19-4	扁平片刃石斧	緑色片岩	最大長:12.6 最大幅:7.9 最大厚:0.9	201	
S 6	埋没谷 5 1層	1203	第51回 PL19-4	大型船刃石斧	閃綠岩	最大長:10.6 △ 最大幅:4.5 最大厚:4.2	390	
S 7	埋没谷 5 1層	1006	第51回 PL19-4	石鍛未成品	安山岩	最大長:19.7 最大幅:7.7 最大厚:4.1	965	
S 8	埋没谷 5 1層	288	第51回 PL19-3	石鏟	サヌカイト	最大長:2.1 △ 最大幅:1.2 △ 最大厚:0.3	0.87	
S 9	埋没谷 5 1層	511	第51回 PL19-3	刮器	サヌカイト	最大長:5.4 最大幅:6.7 最大厚:2.0	59.04	
S 10	B 7 表土	519	第52回 PL19-4	打穴石錐	ダイサイト	最大長:8.0 最大幅:5.0 最大厚:1.8	101	
S 11	C 6 表土	430	第52回 PL19-4	打穴石錐	ダイサイト	最大長:6.1 最大幅:4.4 最大厚:0.9	34.6	

表7 木製品観察表

遺物 番号	地区 遺構・層位名	取上 番号	種別 PL.	種類	樹種	法 葉 (cm)	△現存値	
							備考	
W 1	獨立柱建物 1 P 6	541	第22回 PL20-1	柱材	芯持丸太材	クリ	最大長:35.1 △ 最大幅:16.6 最大厚:12.8	
W 2	ピット群 1 ピット 1	1153	第39回 PL20-1	柱材	芯去角材	スギ	最大長:10.6 △ 最大幅:4.5 最大厚:4.2	
W 3	ピット群 1 ピット 2	1148	第39回 PL20-2	柱材	芯去角材	スギ	最大長:46.4 △ 最大幅:14.6 最大厚:13.6	
W 4	ピット群 3 ピット 12	1147	第39回 PL20-1	柱材	分割材	スギ	最大長:31.1 △ 最大幅:14.2 最大厚:13.2	
W 5	ピット群 3 ピット 13	1152	第39回 PL20-1	柱材	芯去角材	スギ	最大長:27.0 △ 最大幅:16.1 最大厚:8.9	
W 6	ピット群 3 ピット 24	1175	第39回 PL20-2	柱材	芯持丸太材	—	最大長:40.0 △ 最大幅:13.5 最大厚:13.0	
W 7	ピット群 3 ピット 15	1029	第39回 PL20-2	柱材	芯持丸太材	クリ	最大長:48.0 △ 最大幅:15.0 最大厚:14.0	
W 8	ピット群 3 ピット 21	1032	第39回 PL20-1	柱材／軸材	芯去角材	スギ	最大長:31.9 △ 最大幅:15.1 最大厚:13.6	
W 9	ピット群 3 ピット 14	1030	第39回 PL20-1	柱材／軸材	分割材	クリ	最大長:34.1 △ 最大幅:17.5 最大厚:6.1	
W 10	ピット群 2 ピット 4	602	第39回 PL20-1	柱材	芯持丸太材	スギ	最大長:29.2 △ 最大幅:9.3 最大厚:8.7	

表8 金属製品観察表

遺物 番号	地区 遺構・層位名	取上 番号	種別 PL.	種類	法 葉 (cm)	重量 (g)	△現存値	
							備考	
B 1	土坑 6	967	第30回 PL19-2	鉄金具 (銅製品)	最大径:3.3 孔径:0.5 最大厚:0.12	201	眉目文様の透かしを持つ。	
F 1	ピット群 3 ピット 10	1171	第35回 PL19-2	不明鉄製品 (銅製品)	最大長:10.6 △ 最大幅:4.5 最大厚:4.2	-	突起部を持つ。	
C 1	B 7 表土	519	第52回 PL19-2	銅鏡 酒器通宝	最大長:8.0 最大幅:5.0 最大厚:1.8	2.22	明鏡(招請1368年)	

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

バレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

#### 1 はじめに

鳥取県鳥取市に位置する乙亥正大角遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている(第2節参照)。

#### 2 試料と方法

試料は、掘立柱建物1P6の柱W1(試料No.1:PLD-31755)、ピット群1ピット1の柱W2(試料No.2:PLD-31756)、ピット群1ピット2の柱W3(試料No.3:PLD-31757)、ピット群2ピット4の柱W10(試料No.4:PLD-31758)、ピット群3ピット12の柱W4(試料No.5:PLD-31759)、ピット群3ピット13の柱W5(試料No.6:PLD-31760)、ピット群3ピット14の柱W9(試料No.7:PLD-31761)、ピット群3ピット15の柱W7(試料No.8:PLD-31762)、ピット群3ピット21の柱W8(試料No.9:PLD-31763)の、計9点の生材である。いずれも共伴遺物等はみられず、時期は不明である。

試料No.4と7、8には最終形成年輪が残っていた。試料No.1は最終形成年輪が残っている可能性があり、試料No.9は辺材部が残っていたが、それ以外の試料(試料No.2、3、5、6)では最終形成年輪が残っていなかった。樹種同定の結果では、試料No.2、3、4、5、6、9はスギ、試料No.1、7、8はクリであった。測定試料の情報、調製データは表9のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、曆年代を算出した。

#### 3 結果

表10に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めてない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の曆年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範

開内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

#### 4 考察

以下、 $2\sigma$ 曆年代範囲(確率95.4%)に着目して、曆年代の古い順に結果を整理する。

ピット群1 ピット1の試料No.2 (PLD-31756)は1170–1174calAD(1.7%)および1179–1258calAD(93.7%)、ピット群1 ピット2の試料No.3 (PLD-31757)は1190–1263calAD(95.4%)、ピット群3 ピット12の試料No.5 (PLD-31759)は1184–1263calAD(95.4%)で、いずれも12世紀後半～13世紀後半の曆年代を示した。これは、平安時代後期から鎌倉時代に相当する。これらの3試料は、いずれも最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に木が枯死もしくは伐採されたのは、測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

ピット群3 ピット13の試料No.6 (PLD-31760)は1221–1273calAD(95.4%)で、13世紀代の曆年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。この試料は最終形成年輪が残っていなかったため、実際に木が枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりも新しい年代であった可能性がある。

ピット群2 ピット4の試料No.4 (PLD-31758)は1280–1310calAD(53.3%)および1360–1388calAD(42.1%)で、13世紀後半～14世紀後半の曆年代を示した。これは、鎌倉時代から室町時代に相当する。この試料は最終形成年輪が残っており、測定結果は木の枯死もしくは伐採年代を示している。

掘立柱建物1P6の試料No.1 (PLD-31755)は1307–1363calAD(70.0%)および1385–1409calAD(25.4%)、ピット群3 ピット21の試料No.9 (PLD-31763)は1320–1350calAD(39.9%)および1391–1420calAD(55.5%)で、いずれも14世紀前半～15世紀前半の曆年代を示した。これは、鎌倉時代から室町時代に相当する。試料No.1は最終形成年輪が残っている可能性があり、試料No.9は辺材部が残っていた。したがって、これらの試料の枯死もしくは伐採年代は、測定結果よりも少しだけ新しい年代であったと考えられる。

ピット群3 ピット14の試料No.7 (PLD-31761)は1491–1603calAD(76.8%)および1614–1640calAD(18.6%)、ピット群3 ピット15の試料No.8 (PLD-31762)は1476–1530calAD(32.4%)および1539–1635calAD(63.0%)で、15世紀後半～17世紀前半の曆年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。この試料はいずれも最終形成年輪が残っており、測定結果は木の枯死もしくは伐採年代を示している。

#### 【参考文献】

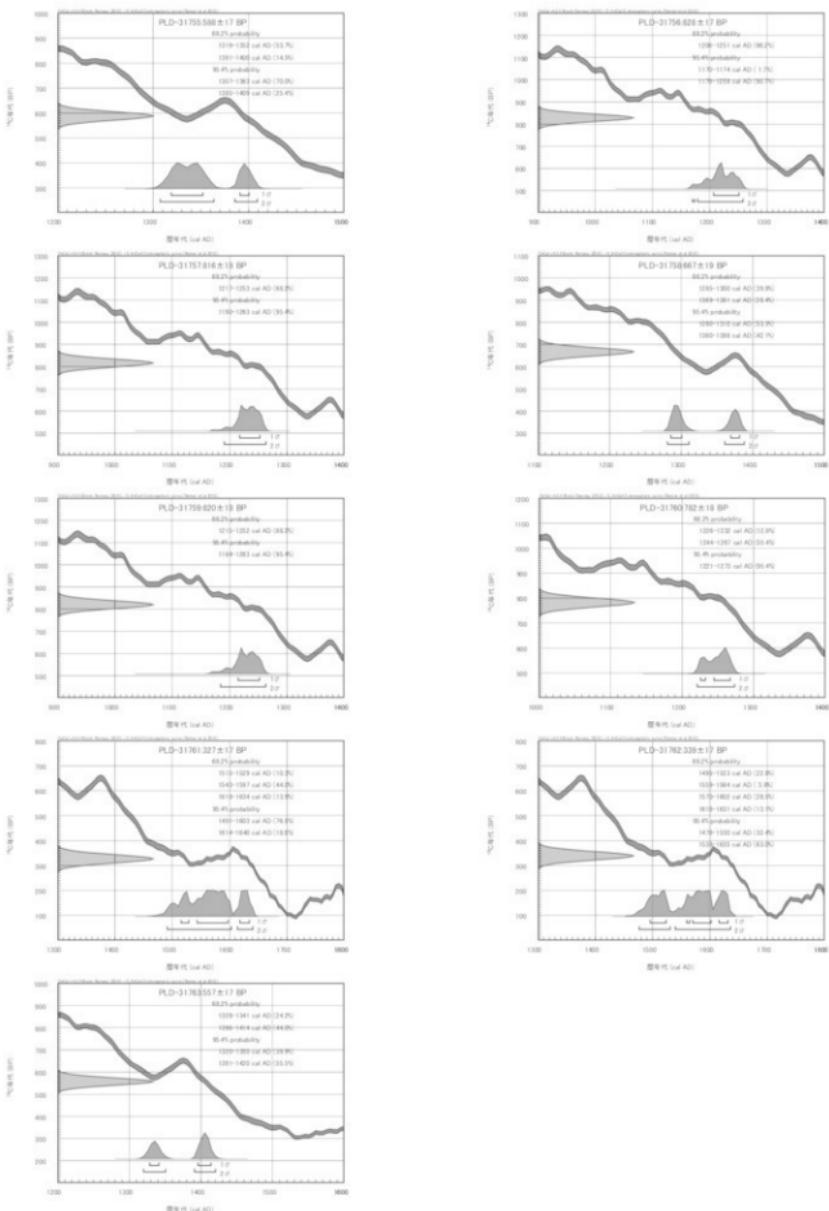
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.  
 中村俊夫2000放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」：3-20. 日本国第四紀学会.  
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

表9 測定試料及び処理

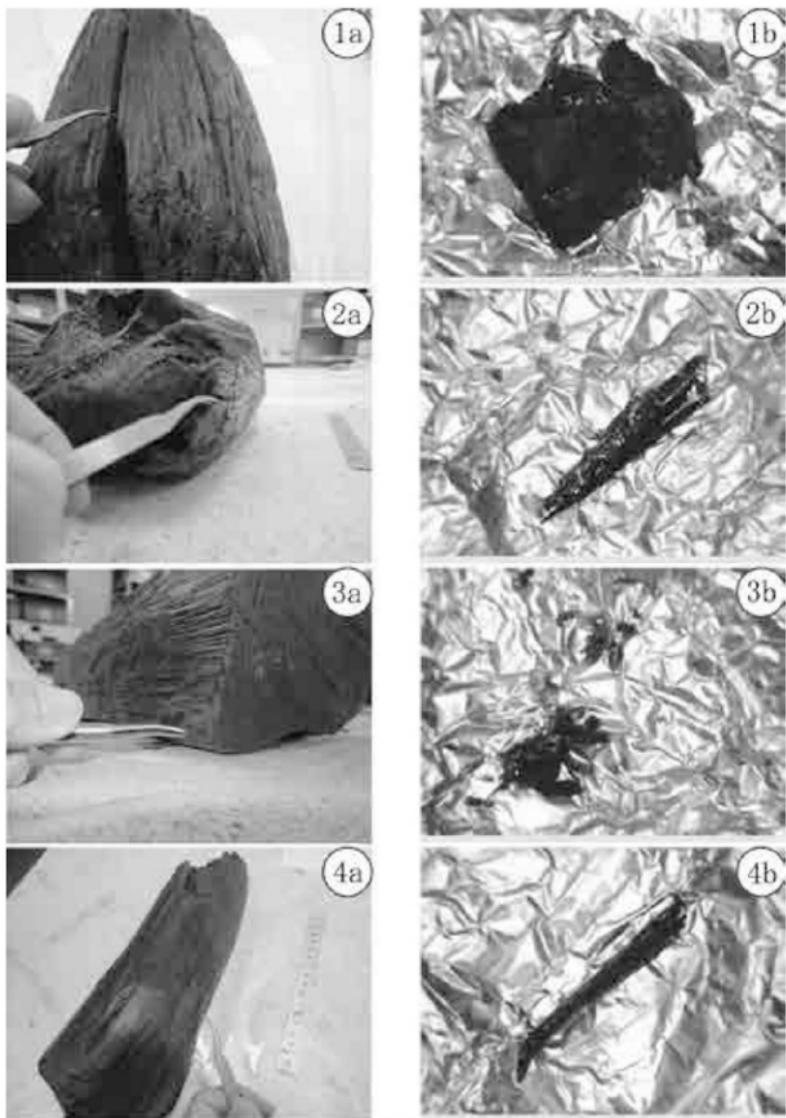
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31755	試料No1 W1 遺構：掘立柱建物1P6 色調：黒	種類：生材(クリ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪?) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31756	試料No2 W2 遺構：ピット群1ピット1 色調：黒褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31757	試料No3 W3 遺構：ピット群1ピット2 色調：茶褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31758	試料No4 W10 遺構：ピット群2ピット4 色調：黒褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31759	試料No5 W4 遺構：ピット群3ピット12 色調：黒褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31760	試料No6 W5 遺構：ピット群3ピット13 色調：黒褐色～茶	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31761	試料No7 W9 遺構：ピット群3ピット14 色調：黒褐色	種類：生材(クリ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31762	試料No8 W7 遺構：ピット群3ピット15 色調：黒褐色～茶	種類：生材(クリ) 試料の性状：心材(最終形成年輪) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-31763	試料No9 W8 遺構：ピット群3ピット21 色調：黒褐色～茶	種類：生材(スギ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪以外) 器種：柱 角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)

表10 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
PLD-31755 試料No1 W1	-25.91 $\pm$ 0.17	588 $\pm$ 17	590 $\pm$ 15	1319-1352calAD(53.7%) 1391-1400calAD(14.5%)	1307-1363calAD(70.0%) 1385-1409calAD(25.4%)
PLD-31756 試料No2 W2	-23.47 $\pm$ 0.14	828 $\pm$ 17	830 $\pm$ 15	1206-1251calAD(68.2%)	1170-1174calAD(1.7%) 1179-1258calAD(93.7%)
PLD-31757 試料No3 W3	-24.98 $\pm$ 0.15	816 $\pm$ 18	815 $\pm$ 20	1217-1253calAD(68.2%)	1190-1263calAD(95.4%)
PLD-31758 試料No4 W10	-25.79 $\pm$ 0.16	667 $\pm$ 19	665 $\pm$ 20	1285-1300calAD(39.8%) 1369-1381calAD(28.4%)	1280-1310calAD(53.3%) 1360-1388calAD(42.1%)
PLD-31759 試料No5 W4	-24.84 $\pm$ 0.16	820 $\pm$ 18	820 $\pm$ 20	1215-1252calAD(68.2%)	1184-1263calAD(95.4%)
PLD-31760 試料No6 W5	-23.51 $\pm$ 0.18	782 $\pm$ 18	780 $\pm$ 20	1226-1232calAD(12.8%) 1244-1267calAD(55.4%)	1221-1273calAD(96.4%)
PLD-31761 試料No7 W9	-28.93 $\pm$ 0.15	327 $\pm$ 17	325 $\pm$ 15	1515-1529calAD(10.3%) 1543-1597calAD(44.0%) 1618-1634calAD(13.9%)	1491-1603calAD(76.8%) 1614-1640calAD(18.6%)
PLD-31762 試料No8 W7	-27.90 $\pm$ 0.17	339 $\pm$ 17	340 $\pm$ 15	1495-1523calAD(22.8%) 1559-1564calAD(3.8%) 1570-1602calAD(28.5%) 1616-1631calAD(13.1%)	1476-1530calAD(32.4%) 1539-1635calAD(63.0%)
PLD-31763 試料No9 W8	-24.97 $\pm$ 0.17	557 $\pm$ 17	555 $\pm$ 15	1328-1341calAD(24.2%) 1396-1414calAD(44.0%)	1320-1350calAD(39.9%) 1391-1420calAD(55.5%)



第53图 历年校正結果



放射性炭素年代測定試料(1)

1a-1b、試料No. 1 (PLD-31755)、2a-2b、試料No. 2 (PLD-31756)

3a-3b、試料No. 3 (PLD-31757)、4a-4b、試料No. 4 (PLD-31758)

a : 試料採取位置、b : 年代測定を行った試料



5a



6a



7a



8a



5b



6b



7b



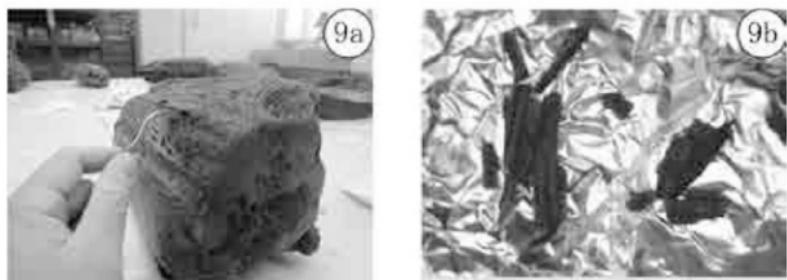
8b

放射性炭素年代測定試料(2)

1a~1b, 試料No. 5 (PLB-31759)、2a~2b, 試料No. 6 (PLB-31760)

3a~3b, 試料No. 7 (PLB-31761)、4a~4b, 試料No. 8 (PLB-31762)

a : 試料採取位置, b : 年代測定を行った試料



放射性炭素年代測定試料(1)

9a-9b. 試料No. 9 (PLB-31763)

a: 試料採取位置、b: 年代測定を行った試料

## 第2節 樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

## 1はじめに

鳥取県鳥取市の乙亥正大角遺跡から出土した柱の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（第1節参照）。

## 2 試料と方法

試料は、掘立柱建物1P6、ピット群1のピット1と2、ピット群2ピット4、ピット群3のピット12、13、14、15、21から出土した柱材、計9点である。放射性炭素年代測定の結果、試料No.2、3、5は平安時代後期から鎌倉時代、試料No.6は鎌倉時代、試料No.1、4、9は鎌倉時代から室町時代、試料No.7とNo.8は室町時代から江戸時代前期の暦年代を示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

## 3 結果

同定の結果、針葉樹のスギと、広葉樹のクリの、計2分類群がみられた。スギが6点、クリは3点であった。同定結果を表11に、一覧を表12に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1)スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図版1・2 1a-1c(No.2)、2a-2c(No.3)、3a-3c(No.4)、4a-4c(No.5)、5a-5c(No.6)、6a-6c(No.9)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(2)クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版3 7a-7c(No.1)、8a-8c(No.7)、9a-9c(No.8)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で單列となる。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

#### 4 考察

掘立柱建物およびピットの柱は、スギとクリであった。木取りをみると、スギは芯持丸木やみかん割り、角材など、多様性があり、クリは芯持丸木とみかん割りであった。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良く、クリは堅硬で耐朽性が高く、軸方向に割裂性が良いという材質を持つ(伊東ほか, 2011)。

試料の時期と樹種をみると、平安時代後期から鎌倉時代の試料No.2、3、5はいずれもスギ、鎌倉時代の試料No.6はスギ、鎌倉時代から室町時代の試料No.1はクリ、No.4とNo.9はスギ、室町時代から江戸時代前期の試料No.7、8はクリであった。鳥取県の集成では、平安時代以降の柱にクリやシイ属などの広葉樹が利用される事例が多く(伊東・山田, 2012)、今回の乙亥正大角遺跡の試料はそれとはやや異なる傾向を示した。乙亥正大角遺跡の周辺の森林環境が、知られている事例の遺跡とは異なっていた可能性がある。

#### 【引用文献】

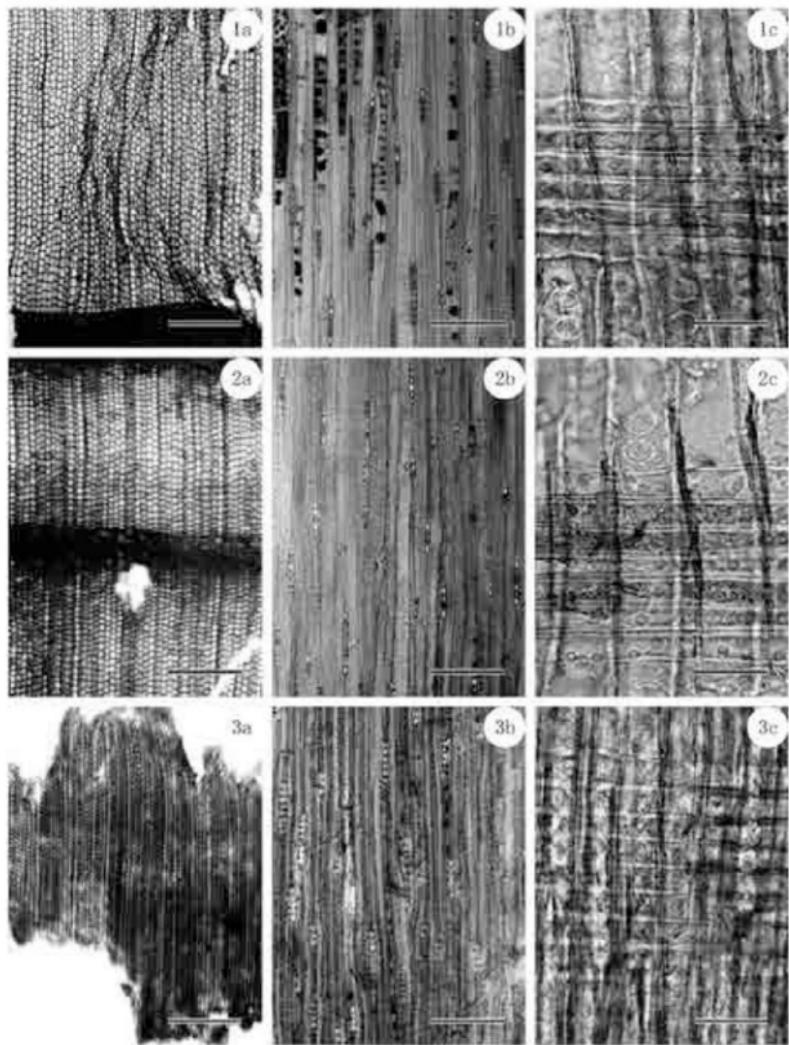
- 平井信二(1996)木の大百科－解説編－、642p、朝倉書房。  
 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和徳(2011)日本有用樹木誌、238p、海青社。  
 伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学－出土木製品用材データベース－、449p、海青社。

表11 樹種別同定結果

試料の時期	平安時代後期 ～鎌倉時代	鎌倉時代	鎌倉時代 ～室町時代	室町時代～ 江戸時代前期	合計
樹種	種別	柱	柱	柱	
スギ		3	1	2	6
クリ				1	2
合計		3	1	3	9

表12 樹種同定結果一覧

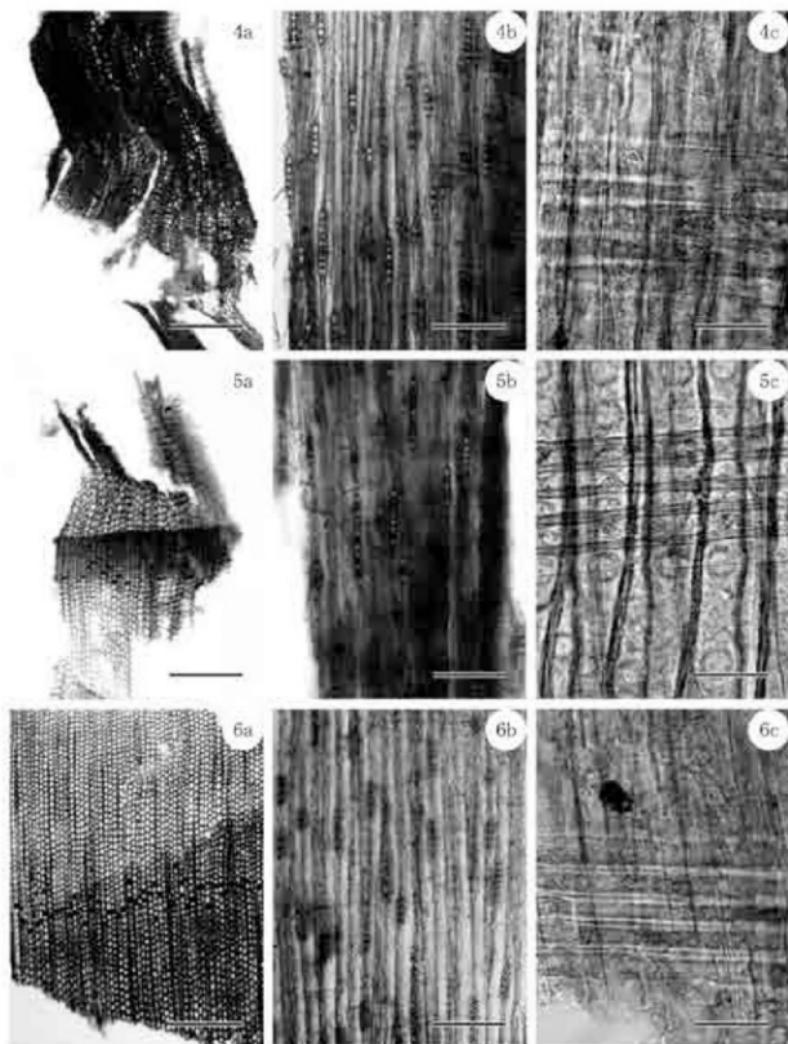
試料No.	遺物No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	年代 測定番号
1	W1	掘立柱建物1P6	柱	クリ	芯持丸木	PLD-31755
2	W2	ピット群1ピット1	柱	スギ	角材	PLD-31756
3	W3	ピット群1ピット2	柱	スギ	芯去みかん割り	PLD-31757
4	W10	ピット群2ピット4	柱	スギ	芯持丸木	PLD-31758
5	W4	ピット群3ピット12	柱	スギ	みかん割り	PLD-31759
6	W5	ピット群3ピット13	柱	スギ	板目	PLD-31760
7	W9	ピット群3ピット14	柱	クリ	みかん割り	PLD-31761
8	W7	ピット群3ピット15	柱	クリ	芯持丸木	PLD-31762
9	W8	ピット群3ピット21	柱	スギ	角材	PLD-31763



図版1 乙斐正大角遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c:スギ(No.2)、2a-2c:スギ(No.3)、3a-3c:スギ(No.4)

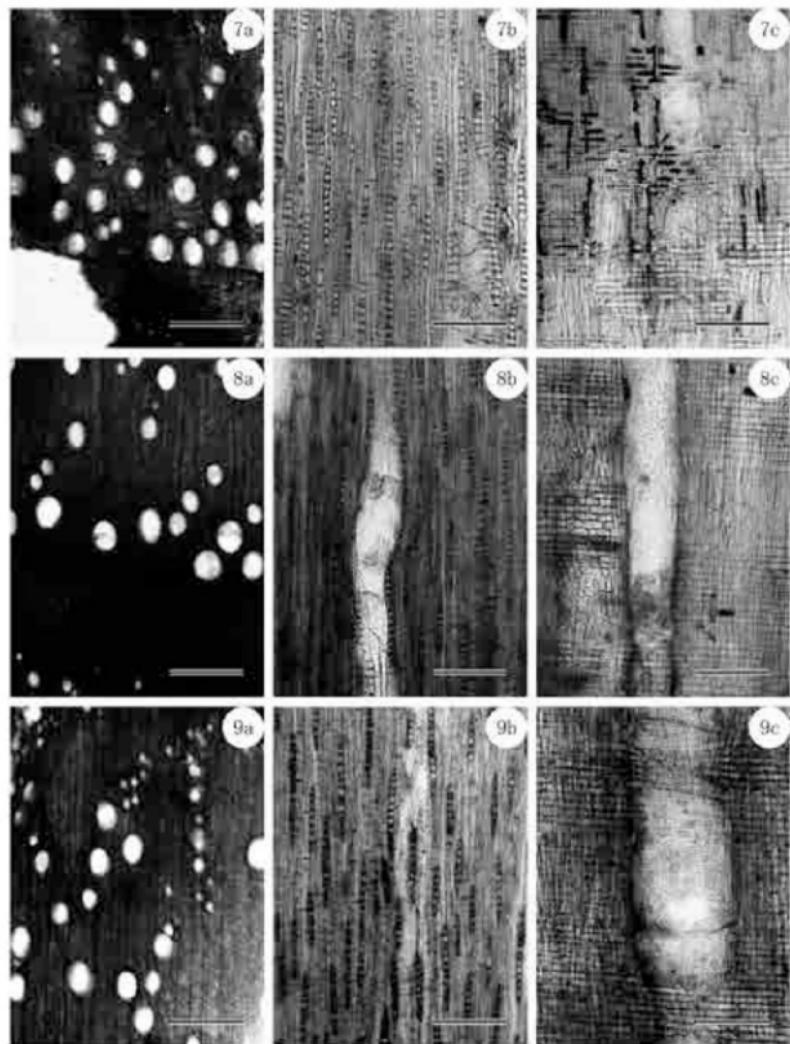
a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)



図版2 乙窓正大角遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真(2)

4a-4c. スギ(No. 4)、5a-5c. スギ(No. 5)、6a-6c. スギ(No. 6)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接縫断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)



図版3 乙亥正大角遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真(3)

7a-7c. クリ (No. 1)、8a-8c. クリ (No. 7)、9a-9c. クリ (No. 8)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)



## 第5章 調査のまとめ

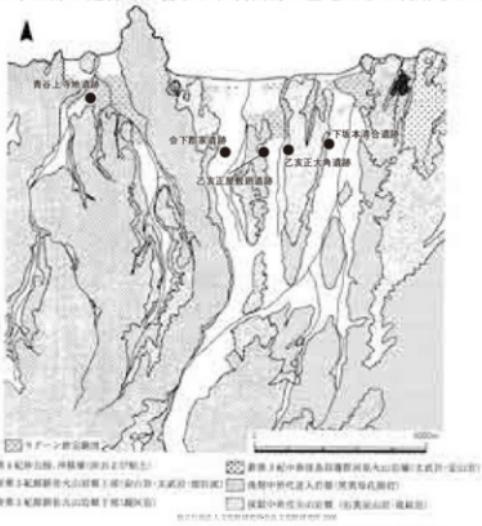
乙亥正大角遺跡では、縄文時代晚期から近世にかけての遺構や遺物を確認した。遺構は希薄であるが、遺物の出土量を考慮すれば、弥生時代後期から古墳時代前期と中・近世を中心とする遺跡であることが分かる。よって、両時期における遺跡の性格を検討することで、本書のまとめとしたい。

まず、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては丘陵斜面を中心に小規模な集落が営まれたと考えられる。調査地ではテラス1～4が造成されているが、埋没谷1から当該期の土器が多く出土しており、周囲の斜面にはさらに多く段状遺構が営まれていたことが推測される。断片的ではあるが、鳥取市教育委員会が調査を実施した隣接地(第3トレンチ)でも段状遺構の周壁溝とみられる溝が検出されている(鳥取市教育委員会2014)。

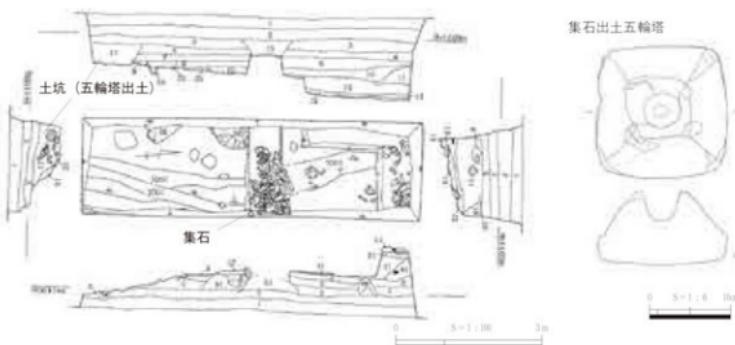
遺跡周辺では当該期の集落として、乙亥正屋敷廻遺跡や会下郡家遺跡、下坂本清合遺跡などを挙げることができる。とりわけ、平野を隔てた西側丘陵裾に位置する乙亥正屋敷廻遺跡はこの地域における拠点的集落と目される。本遺跡と同様に急峻な斜面地に段状遺構を複数構成することで居住域を形成しており、丘陵上には墳丘墓(重山1号墓)も築造されている。さらに、斜面裾から低地にかけては大規模な木造構造物などが確認され、膨大な量の土器や木製品に加え、八萬鏡の破鏡や巴形銅器などが出土している点は特筆される<sup>1)</sup>。集落に適さない狭隘な谷部に遺跡が営まれた背景には、当時平野に形成されていたとみられる潟湖の存在が大きいと考えられる(第54図)。復元された古地形を見ると、乙亥正屋敷廻遺跡はその潟湖に面した、もしくは意識した立地といえ、「港湾集落」と評される青谷上寺地遺跡と同様に海上交通の拠点としての役割を担っていた可能性も十分にあろう。よって、本遺跡は潟湖に面し、乙亥正屋敷廻遺跡周辺に営まれた衛星的な集落の一つと評価しておきたい。

次に、中世から近世にかけては斜面裾の平坦部に建物群が営まれ、斜面部は墓地として利用されたことが窺える。建物群の性格は特定できないが、放射性炭素年代測定結果に依拠すれば、中世を通じて継続的に営まれた可能性がある。

墓地については今回の調査地で明確な墳墓を確認したわけではないが、先述した試掘調査の第3トレンチで検出された集石と土坑が注目される(第55図)。「集石」は掘方を有し、内部に充填された礫の中には五輪塔火輪が含まれている。また、「土坑」とされる遺構にも礫が充填され、五輪塔水輪が出土している。両遺構は基本的に同一の性格を有するとみられ、人骨や副葬品は出土していないものの、墓制の一形態として捉えることは可能であろう。鳥取県内の五



第54図 遺跡周辺の地形と地質



第55図 乙亥正大角遺跡試掘トレンチと出土五輪塔

輪塔の出土状況を検討した中森祥は埋葬施設を伴わない石積基壇や集石、マウンドが「詣り墓」となる可能性を指摘している(中森2004)。集石土坑はさらに斜面に造成された平場を中心に複数基壇されたことが推測され、ある程度のまとまりを持った墓域を形成されていた可能性も十分にある。今回検出した集石土坑2、3や道路遺構1~4についてもこうした葬送に関わる遺構とみてよいであろう。字名等に遺存していないが、地元の人によると調査地周辺は『大五輪』と呼ばれていたようであり、本来、相当数の石塔が築かれていたことは想像に難くない。遺跡周囲には中世山城や砦も數多く築かれ、発掘調査でも寺内庵寺、寺内京内遺跡、柄杓目遺跡などで中世墓や多数の五輪塔や宝鏡印塔が出土しており、戦国末期を中心とした因伯を巡る激しい争乱を物語る資料といえるのかもしれない。

今後、周辺地域の発掘調査成果を加味し、さらに当該地域の歴史が解明されることを期待したい。

## 【註】

1) 2017年度報告書刊行予定

## 【参考文献】

鳥取市教育委員会2014『平成25(2013)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

中森祥2004「五輪塔はどこに立てられたかー山陰地方における発掘調査からみたその様相ー」『伯耆文化研究』第6号伯耆文化研究会

## 【図出典】

第54図: 山中敏史編2006『郡衙周辺寺院の研究ー因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心にー』

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

第55図: 鳥取市教育委員会2014『平成25(2013)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』を一部改変



写真5 調査地周辺に集積された五輪塔

# PLATE







1 調査後航空写真(北から)



2 調査後航空写真(西から)



1 調査後航空写真(上が東)



2 斜面部第1遺構面完掘状況(東から)



1 集石土坑 1 検出状況(東から)



2 集石土坑 1 半裁状況(東から)



3 集石土坑 2 検出状況(北から)



1 集石土坑3検出状況(南から)



2 道1完掘状況(北から)



3 道2完掘状況(北から)



1 道3・4完掘状況(北から)



2 斜面部第2遺構面完掘状況(東から)



3 斜面部第2遺構面完掘状況(西から)



1 埋没谷 1 土層堆積状況(北西から)



2 平坦部埋没谷 5 完掘状況(北西から)



1 テラス1・2完掘状況(北西から)



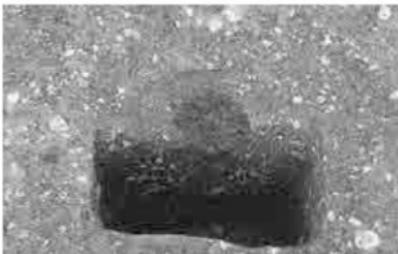
2 テラス3完掘状況(北西から)



1 テラス4完掘状況(南から)



2 挖立柱建物1完掘状況(西から)



3 挖立柱建物1柱穴5土層断面(南から)



4 挖立柱建物1柱穴6土層断面(南西から)



1 掘立柱建物2完掘状況(東から)



2 土坑2完掘状況(西から)



3 土坑3完掘状況(南東から)



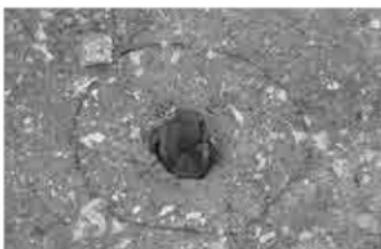
1 土坑6完掘状況(南から)



2 ピット群1ピット2・3土層断面(南から)



3 ピット群2ピット4土層断面(南西から)



4 ピット群2ピット7検出状況(南から)



5 ピット群2ピット8土層断面(西から)



7 ピット群3ピット12土層断面(南から)



6 ピット群2ピット6土層断面(西から)



8 ピット群3ピット13土層断面(南から)



1 ピット群3ピット19土層断面(南から)



2 ピット群3ピット21土層断面(南西から)



3 埋没谷5遺物出土状況(1)(北から)



4 埋没谷5遺物出土状況(2)(南東から)



5 埋没谷5遺物出土状況(3)(北西から)



6 埋没谷1遺物出土状況(1)(南から)



7 埋没谷1遺物出土状況(2)(南西から)



1 道 1 出土磁器



2 道 1・ピット群・埋没谷 1 出土土器



3 埋没谷 1 出土土器(1)



42



30



66



63



49



47

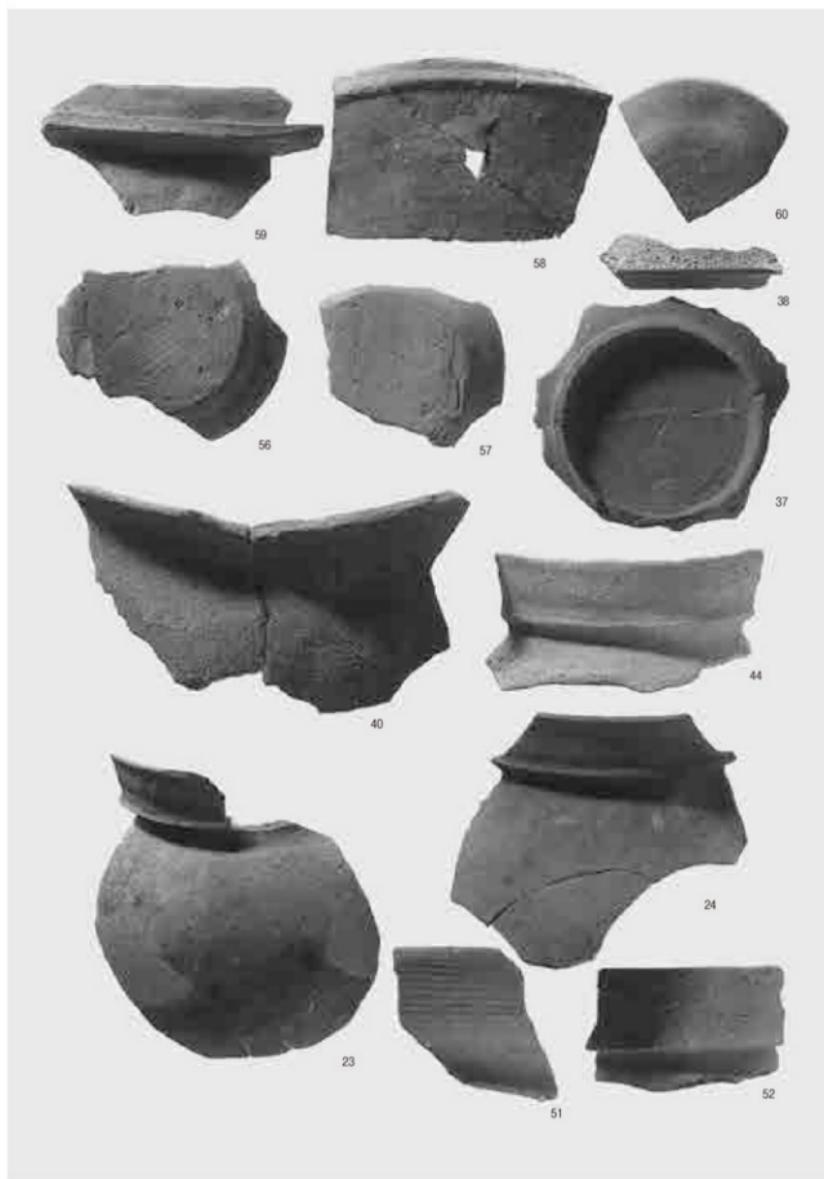


36

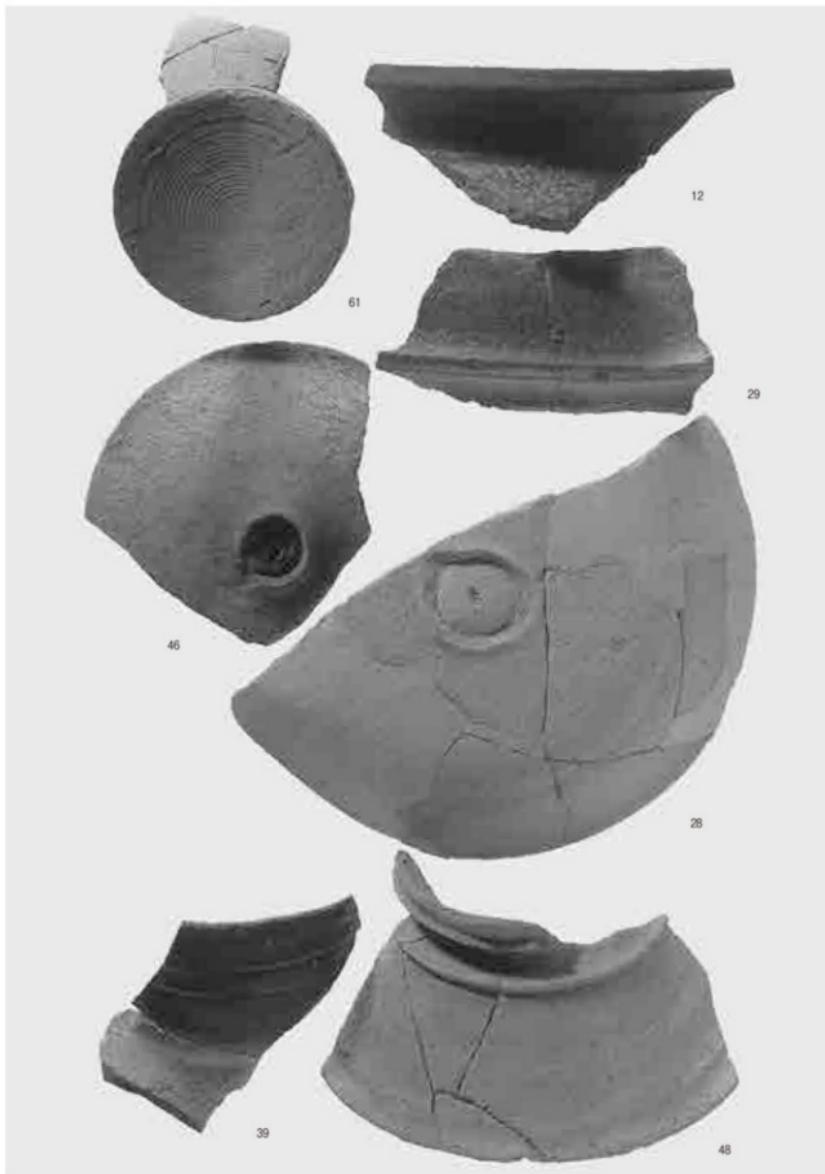


53

1 埋没谷 1 出土土器 (2)



1 埋没谷 1 出土遺物(3)



1 埋没谷 1 出土遺物 (4)



1 埋没谷 1 出土遺物(5)



33



55

1 埋没谷 1 出土土製支脚



81



83



101



102



96



106

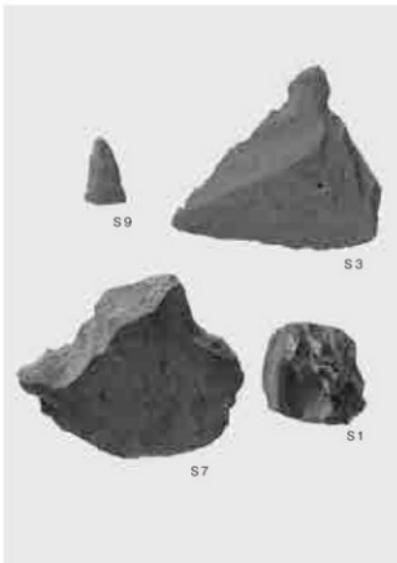
2 埋没谷 5 · 表土出土遺物



1 集石土坑 1 · 埋没谷 5 出土遗物

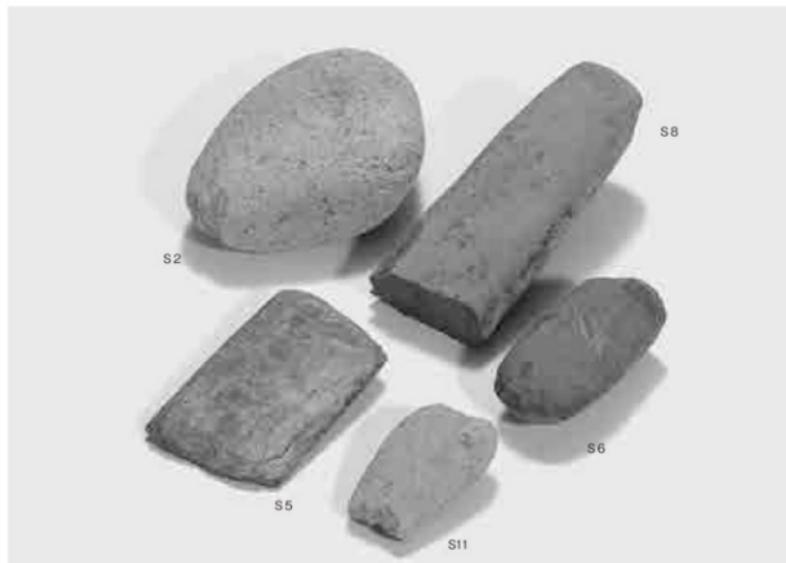


1 表土等出土土器



2 鐵製品・銅製品・古錢

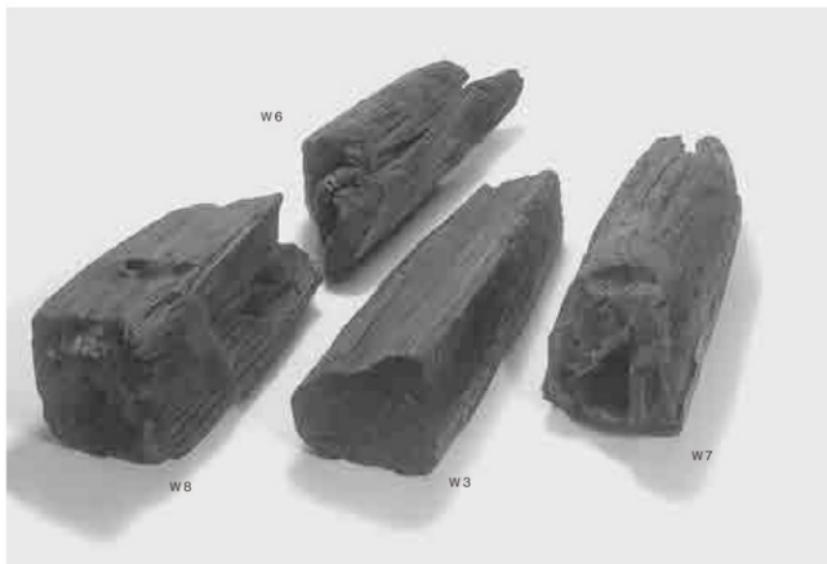
3 剥片石器・玉作関連遺物



4 石器



1 挖立柱建物1・ピット群出土柱・杭材



2 ピット群出土柱・杭材

報告書抄録

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 62  
一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXII

鳥取県鳥取市鹿野町

**乙亥正大角遺跡**

発 行 2016年10月31日

編 集 鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取市国府町宮下1260番地

電 話 (0857)27-6711

発行者 鳥取県埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社鳥取平出版社

〒680-0845 鳥取市富安1丁目79番地







